

# チエの青春



south couch boy

## はじめに

---

この作品（というより空想）は、2001年の正月に想像の赴くままに一気に書き上げたものです。

2000年の末に、ふとしたことから『ジャリン子チエ』を読みなおし、少年時代に虜になったこの漫画の世界に実に久しぶりに浸りました。『チエ』は一切未来の設定がない「永遠の今」の中で進行する漫画ですが、チエが成長して大人になったらどうなるのかあれこれ空想していた当時の記憶が蘇り、試しに書き始めたら登場人物が私の思惑を超えて動き回り、いつのまにかこんな話になっていました。

今読み返すと気恥ずかしい限りですが、あの頃の妄想を成仏させるためにまとめてみました。

2013年4月

south couch boy こと ミナミの民

## 序章

---

あれから7年が過ぎた。

『じゃりん子チエ』連載終了と同時に行方をくらまし、謎の生活を送ってきたコケザルが7年ぶりに大阪に戻ってくるところから物語は始まる。

コケザルはいまや17歳の逞しい、ふてぶてしさすら備えた若者になっている。この間は、いろいろあったが、持ち前の生活力と悪知恵を駆使してたくましく生きてきた。

今のコケザルは、18歳になっているはずのチエと7年ぶりに再会することしか頭にない。

この日のために彼はどんな苦勞にも耐え、どんな困難も突破してきたのだ。

東京でヤクザと関わり、危ない目に遭ったときにも、警察に捕まりそうになったときにも、

さまざまな修羅場をくぐり抜けてきたときにも、心の支えになったのは、

いつか一人前になったときに、西萩に戻ってチエに再会し、

身も心もたくましくなった自分を見せてやりたい、そして...という思いだった。

コケザルは西萩の駅に着くと真っ先にホルモン焼き屋『チエちゃん』に向かうつもりだった。

が、駅前で見えた学生二人組と軽く喧嘩騒ぎを起こしてしまう。

しかし、これは久しぶりの大阪に身を慣らすための軽いウォーミング・アップのようなものであった。

造作もなく大柄な年上の学生2人を叩きのめしたコケザル。カツアゲされそうになったのを逆に金を巻き上げる。

そしていよいよ、はやる心を抑えて、「チエちゃん」へ歩を進める。

今は店の前で掃除している頃だろうか。チエもすっかり大人になって、「じゃりん子」から一人前の娘に成長していることだろう。

その姿をコケザルは何度空想したことか。チエがヨシ江似の娘になることをコケザルは確信していた。

少年時代、すさんだコケザルの心を一時でも潤してくれた唯一の大人は、ヨシ江だった。ヨシ江にだけは、コケザルは真情を吐露することができた。あの頃、チエには同類としての親しみを感じていた（チエはそれを頑なに否定したが）。

しかし、今のチエは、コケザルの空想の中では、同類としての親しみ、母親としての優しさに加えて、女性としての魅力をも備えた存在であった。孤独の中に生きる者の常である、幾分暴走気味の豊かな想像力によって、チエの姿はいまやコケザルにとって救いの女神のように偶像化されていた。

これからやってくる出会いの瞬間が、コケザルの頭の中で何十回、何百回もシュミレートされていたのは言うまでもない。あたかもヨシ江が家出から戻ってきたときの対応を丹念にシュミレートしていたテツのように。

しかしコケザルはテツよりもはるかに異性に対して直接的で、ある意味狡猾な人間である。テツのような屈折した愛情表現はコケザルには無縁であった。

この7年間、モてるとはおせじにも言えない生活を送ってきたコケザルだが、それでも多少の異性との関係はあった。初体験もすでに済ませていた。それでも一人の女にのめり込むことがなかったのは、自分にはもう決まった女（ひと）がいるという内心の確信があったからだ。チエはまぎれもなく「運命の女」だった。コケザルはときどき、自分がチエと結ばれることは生まれる前から決められていたような気分になるのだった...

ホルモン焼き「チエちゃん」が近づいてくる。ついに何年も前から思い焦がれ、待ちに待った瞬間がやって来ようとしている――

しかし、今、コケザルの目の前には、信じがたい光景があった。

もと店のあった場所は完全な更地になっていたのである。

コケザルが思わず、その場にいた、何か此処には場違いに思われる老婦人に店について尋ねた。

かつてここにあったホルモン焼きの店はどうなったのか？

老婦人がさも当然のように衝撃的な答えを放った。

「ああ、この家は借金で夜逃げ、一家離散しましたわ」

「嘘つけ！ あの家の連中はそんなことでくたばるほどヤワな奴らちゃうど！ オバン、ホンマのこと言わんかい！」

思わず柄の悪い言葉が口をついて出た。

「オバンゆうな、このクソガキ！」いきなり強烈な一発が飛んだ。

（「このオバン、タダモンとちゃうかも...」）

という思いが一瞬コケザルの頭をよぎった瞬間、

「あんたこそチエちゃんの家と何の関係があるんや」

「ワシは...ワシはチエの内縁の夫じゃ」

「アホゆわんとき。あんたまだ未成年やろ。それに何で内縁の夫がチエちゃんのこと尋ねなあかんのや」

「.....」

「もおええわ。あんたみたいなスジの悪いモンと関わらせん方がよさそうや」

「オバン、チエのこと...」

「オバンゆうな！」すかさず平手打ちがピシャッと来た。

「チエちゃんがどこにおるかは教えたる。会うかどうかは自分で決め」

「??？」

「ついて来るか」

## 第一章

---

謎のオバンはコケザルを駅前の大衆食堂の前に連れて来た。

コケザルがさっき喧嘩した場所である。

「めしや ホルモン」という看板が出ているだけで、あとは何のしるしもない店だ。

「夕方になったら店開くさかい、それまでどっかで待っとき」

「この店...」

「今は誰もおらんで」

「ほなわたいは用事あるさかいに」と言ってオバンは姿を消した。

「.....」

店の前で立ち尽くすコケザル。

屋根の上には猫の姿が...

\* \* \*

ひょうたん池のほとり。

「小鉄～、小鉄おるか」

ジュニアはもう立派な年配の猛者猫となり、京阪神にその名を轟かせている。大阪のネコの用心棒兼総元締め的存在だが、いまだに小鉄とは無二の親友だった。

「なんや、ジュニアか」

相当年老いた様子的小鉄が、寝そべったままめんどくさそうに振り向く。

小鉄はもうすっかり老猫となり、ときどき訪ねて来るジュニアに会う以外は完全な隠居生活を送っている。もっとも、ジュニアを通して周囲の出来事はすべて熟知しているが。

「あの～ええかげんそのジュニアゆうのやめてくれへんか。ワシ京阪神では『アントン大将』で鳴らしとるんやから。せめてアントンとか...

「まあええわ。それよりコケザルが戻ってきたど。あのガキ、いっちょまえのカッコしとったけど、あの面構えは絶対コケザルや」

「ほんでワシにどうせえゆうねん」

「どうせえて...何かおもろいことなりそうやんけ。どうや、久しぶりに二人で見物せえへんか」

「ワシの人生はあの店と共に終わったんや...もういまさら誰に何の興味もない」

「そやかてチエちゃんがまたややこしいことに巻き込まれたらどうすんねん、大事な時期やのに」

「君にまかせたよ、ジュニア君。働き盛りのパワーとバイタリティに溢れた君に」

「無気力になったなあ...店がなくなってからすっかり別人（別猫？）になってしもた...

ええわ、どうなっても知らんからな」  
去っていくジュニア。

\* \* \*

再び食堂の前。

駅前でコケザルと喧嘩した二人組が現れ、コケザルの姿を発見。とっさに逃げようとする。  
呼び止めるコケザル。

「こら待て！ ちょっと聞きたいことがあるんや」

学生A「金ならもうないど」

「アホ、金のことちゃうわい。この店のことや。誰がやっとなねん」

学生B（少し驚いた様子で）「お前、この店に何か用でも...」

「いらんことゆわんと答えたらええねん」

A「半年位前からかな、たしか女手二人でやっとする」

ちなみに現在は9月である。

コケザル「ひょっとして、母親と娘の二人か」

A「なんや、知っとなのか。二人ともちょっとした美人で評判なんや」

B（焦った様子でAに）「いらんこと言うな」

コケザル「何時から開くんや」

A「今4時半か...そろそろとちゃうか」

B「じゃ、わしら用事あるから、これで」

すると道の向こうから女の人が歩いてくるのが見えた。とっさに身を隠すコケザル。

ヨシ江はんだ。7年経ったが、あまり外見は変わっていない。

というより、不思議なほどまったく変わっていない。心なしか、やせたようにも見える。

店の鍵を開けて、中に入っていく。これから店の準備を始めるような雰囲気。

そのまましばらく中をうかがっていると、また道の向こうから人の気配が。

チエだ！

高校の制服に身を包んでいる。カバンも高校のだろう。

背は高くなって、すっかりスマートな体型になり、遠目にはヨシ江はんの姿に似ている。

顔もヨシ江はんの若い頃にそっくりだ。それでも、赤いポッチリこそないが、髪は肩の所まで伸ばし、小学生の頃のチエと変わらない愛嬌のある雰囲気を漂わせている。

もっと近くで見たい。コケザルは駆け寄りたい衝動に駆られた。

しかし、それを引き留めたのは、チエの隣を一緒に歩いている明らかに同じ位の歳の男の姿だ。

学校の同級生だろうか。制服は着ていないが。何だか楽しそうに話をしている。

本当ならこちらから近づいて「チエー、久しぶりやな」と声をかける予定なのに、その男の存在のために、出て行くのがためらわれ、コケザルは物陰に身を隠したままチエを見守った。

## 第二章

---

店の前でチエと男は立ち止まった。

チエ「ほな、ウチ店の準備あるから」

男「...さっきの話、考えといてや」

チエ「うん...明日にでも返事するわ」

男「じゃあな、待ってるから」

男立ち去る。にっこり微笑んで男に手を振るチエ。

チエ、店の引き戸を開けながら、「お母はん、先に来てたん！」

そして戸をピシャと閉めた。

声をかけそびれたコケザル。心の中は「なんや、あの男...」の考えで一杯だ。

「あかん、何か調子狂てきた。ちょっとパチンコでもして、夜にまた来よ」

\* \* \*

食堂の中。

駅前のありふれた大衆食堂といった雰囲気店内。4つほどのテーブルに、カウンター席。

下はコンクリート打ちっぱなし。

椅子を上げて店内の掃除をするヨシ江。カウンターの奥で準備するチエ。

チエ「お父はんの具合どう？」

ヨシ江「今日もチエのことばかりゆうてましたわ」

チエ「ウチもたまには顔出したった方がええのかな」

ヨシ江「そらそうですわ。お父はん、なんでチエが来んのやゆうて...

あんたも忙しいのはわかるけど、時々は顔出してあげんと」

チエ「でもウチが行っても最近テツ、ウチと目エ合わせへんし。

「こないだなんか黙って余所見したままロクに話もせえへんかってんで」

ヨシ江「.....」

このチエの言葉には理由があるのだ。テツは決してチエが嫌いになったのではない。

チエが子供のときは素直に可愛がっていたテツも、チエが大きくなって、だんだん一人前の娘になり、

しかもますますヨシ江の若い頃に似てくるのにしたがって、かつてヨシ江に対して持っていたのと同じような屈折した愛情表現を示すようになってきたのである。特に人前ではチエと話をしなくなった。それどころか、二人でいることさえ避けるようになった。

ふつう、この時期になると娘の方が父親と一緒に居るのを嫌うものだが、この親子は逆で、むしろ娘の方が積極的に父親に近づいていき、チエはテツが困惑するのを楽しむようにすらなっていたのだった。



かつては「ウチは日本一不幸な少女や」と口癖のように言い、仕事もせず訳の分からない騒動ばかり起こす父親（テツ）を恥ずかしく思い、憤っていたチエだが、この頃は、周囲の人々から自分の存在を認められてきた心の余裕からか、そんなテツの存在を許容するようになっていた。そしてテツを父親としてよりは愛すべき駄目オヤジとして、何かと世話を焼き、親しく愛情を込めて接するようになってさえいた。

そうなってくるとテツとしてはかえって気持ちが悪い。家の中にヨシ江が二人いるようなものだ。

もっともチエはヨシ江よりもはるかにパワフルで、シャレがきつい。

とにかく、チエとテツの関係は誘因と反発、愛とその裏返しとしての拒絶の入り混じったアンビバレントで緊張感のあるものになっていたのだった。そして、ある意味その緊張感がホルモン屋「チエちゃん」がなくなる一因にもなったのだ。

ヨシ江はむしろ、時として高まりすぎる二人の間のテンションを緩和する役割すら引き受けざるを得ない状況になっていたのである。

ここで簡単に現在の状況を説明しよう（今のところ分かる範囲で）。

<チエ>

18歳。大阪市立西萩高校3年生。小学校を卒業し、中学生に入ってからホルモン焼き「チエちゃん」の実質的経営をしながら、学校に通い続ける。しかし勉強は小学校のときより頑張り、涙ぐましい努力の結果、みごと高校に合格。高校に入ってから天性の俊足を買われ、強引に陸上部に入部させられる。練習にはほとんど出ないにもかかわらず、1年生のとき大会でいきなり驚異的なタイムで優勝してしまい、新聞や雑誌などにも取り上げられる。それ以外にも、文芸部の発行する季刊誌にエッセーを書いたりして文筆の才能を発揮。店も連日チエ目当ての学生で賑わうほどの人気者に。

今は、理由あってホルモン屋がなくなった後にできた駅前の大衆食堂「チエちゃん」で放課後に働きながら（名目上は親の店の手伝い）、進路について頭を悩ませる毎日。

<ヨシ江>

中学高校を通じてチエのよき相談相手、心の支えとなり、チエの勉強や仕事、精神面をサポート。

今は昼間洋裁学校に勤めながら、夜は食堂「チエちゃん」で働く（名目上は店の主人）。

<ヒラメ>

チエと同じ中学、高校に通う。性格は相変わらず控えめで心優しいが、高校では美術部の部長として活躍。来年の春からは美術学校に入って画家を目指そうと思っている。

<マサル>

中学から中高一貫の私立進学校に通う。最初はチエに会えない（悪口を言えない）ストレスから

ノイローゼに陥ったこともあったが、やがて立ち直り、今では高校での成績はトップクラス。来年の春には一流大学に入ることが確実視されているが、本人の心には一抹の不安が...

<オバアはん（菊）>

70代後半でも気力、体力共に衰える気配なし。元気にホルモン屋を経営しているが、ホルモン屋「チエちゃん」閉鎖を巡る騒動（後述）で最近はずいぶん少し疲れ気味。

<オジイはん>

7年分老け込んではいるが、ボケたりはしていない。相変わらずの性格。

<花井拳骨>

やや老けたが、相変わらず矍鑠としている。残りの余生をテツと心中する覚悟。

そして...

<竹本テツ>

???

\* \* \*

パチンコ屋を出たコケザル。

「なんかこの辺もシケたなあ...不景気のせいか、町のオッサンらの顔色もさえんし...」

「それより今日まだヤクザを一人も見んのはどういうこっちゃ、なんか気持ち悪いな」

「ワシがおらん間にこの辺になんかあったんかな...チエの店もつぶれてるし」

「何より気持ち悪いのは、この辺ウロウロしててテツの姿が見えんことや...」

再び食堂の前に来る。「チエちゃん」の看板とノレンがかかり、店の中には灯りがついている。

「.....」

意を決したように、ノレンをくぐる。店内は仕事帰りの労働者や、学生で賑わっている。

「いらっしゃーい」

とチエの声。

と、正面には昼間のオバンの顔が！

「あんた、やっと来なはったか」

「チエちゃん、あんたの内縁の夫がお見えやでー」

カウンターの中にいたチエ「誰がナイエンの夫やねん！」

それからコケザルの顔を見て「コケザル?!」

「……………」

何と言っていいのか、コケザルは言葉が出ない。想定していなかったシチュエーションの中で、どう振る舞うべきか頭の中は高速度で回転している。

それにしても、今ようやく間近に見たチエの姿の、何と眩しいことか。

ヨシ江似のいい女になるだろうとは想像していたが、今日の前にいるのは、それ以上の美しさと愛らしさと生命力に満ちた一人の逞しい妖精だった。かつて自分は将来父親のテツに似た顔になるのではないかと真剣に悩んだチエだが、幸いなことに、父に似たのは、どうしようもない男でありながらどことなく（特に異性に対して）人好きのするテツの、カリスマ性すら帯びた、常人離れしたオーラだけだったようだ。彼女の周囲に崇拜者が群がるのも肯ける。もっともそのときのコケザルにはそこまで知る由はなかったが――

「…チエ、お前あの店どないしたんや」

コケザルはどぎまぎしながらもようやく言葉を絞り出した。

「ウチ、今忙しいねん。悪いけどややこしい話は後にして」

チエの口調は冷たかったが、悪気はなかった。確かに今は込み入った話をする雰囲気ではない。カウンターは一杯だったので、とりあえずテーブルの開いている席に座り、注文することにした。

目の前に座っているのはあの「オバン」だった。

そのとき、それまで食事を運んだりして立ち働いていたヨシ江が近寄ってきた。

「久しぶりやないですか、どうしてはりましたん」

そこには驚きと共に喜びの響きもあって、コケザルは思わず心に暖かいものがこみ上げてくるのを感じた。そんな感覚は本当に久しぶりだった。

無言で煙草に火をつけるコケザル。

オバンが一言。

「さっき二人から話聞いたやけど、あんたもたいがいメチャメチャな人間ですな」

「……何でワシのことが分かったんや」

「目で見たらカタギの子やないことくらい分かりますわ。チエちゃんを知ってるあんた位の年でカタギでない子いうたらコケザルしかおらんで二人がすぐピンと来たんですわ」

ヨシ江が口を挟んだ。

「まあまあ、話したいこととか聞きたいことは色々ありますやろ。店閉めてから話しましょ」

コケザルはメニューの中からとりあえず「ホルモンうどん」を注文した。

メニューはカレーやチャーハンなどごくシンプルな料理から構成されていた。定食は1種類で、日替わりだった。たいてい「ホルモン定食」だろうと想像はついたが。

チエはカウンターの中でホルモンを焼き、その他の料理もしていた。前のホルモン焼き屋に比べたら設備はずっと整っていた。

酒類やビールももちろんあったが、以前のように「二級酒」や「ばくだん」はなかった。

客層も以前の「チエちゃん」とは明らかに違っていた。

ニッカポッカや鉢巻きの姿はなく、もう少し「安定した」職についていそうな労働者や、学生風の姿が目立つ。学生といってもいわゆる貧乏学生には見えない。

料理や酒の値段は決して高くはなかったが、かつてのように千円あればたらふく喰って浴びるほど飲めるというにはほど遠かった。ホルモン焼きがメニューの中心に据えられていることを除けば、まさにごく普通の大衆食堂だった。

これは、時代が変わったということなのか、チエの家庭の事情が変わったということなのか。しかし色々な印象がいっぺんに押し寄せてきて半ばパニック状態にあるコケザルにはそれを分析する余裕などなかった。

\* \* \*

店は夜十時頃に閉まった。最後の客がチエの「おおきに、また来てやー」の声に送られて出ていくと、店の中はチエ、ヨシ江、オバン、コケザルの四人だけになった。

「あんたあれから今までずっと何してたんや」

後片付けをしながら、チエが初めてコケザルに話しかけた。

「どうせロクなことちゃうやろけど」

二人きりになれば色々話したいことはあるのだが、ヨシ江と、謎のオバンのいる前では本心を打ち明ける気にはなれなかった。

「あんたのお父はんとお母はんどんだけ心配した思てるんや」

「ワシ、ちゃんと置き手紙残していったやんけ。読まんかったんかい」

「まさかホンマに何年も帰ってこんようになるなんて誰も思わんやろ。

ウチも今さら呆れて怒る気にもならへんけど、はよお母はんとこに帰ったり。

さっき電話しといたから、もうじきここに来るわ」

「いらんことせんでええん...」言葉の途中でオバンの一喝が入った。

「チエちゃんの言うとおりのや。親不孝もええかげんにせえ！」

「まあ、コケザルちゃんもいろいろあったんですやろ。お母さん来はったらゆっくり話しましょ」

（「なんかマズイ雰囲気やな...こんなはずじゃ...」）

コケザルは予想外の展開に戸惑うが、ここで言いたいことを何も言わずに引き下がるわけにはいかない。

「ちょっと待て、チエ、ワシお前に話があるんや」

「なんや」

「頼む、しばらく二人きりにさしてくれ」

ここまできたらシナリオとかプライドにこだわっている余裕はない。コケザルはヨシ江とオバンに訴えた。

「チエ、ちょっと来てくれ」

コケザルはチエの手を引っ張って外に連れ出そうとする。

「何すんの！」

チエは瞬時に手を振りほどく。

「じゃあここで一つだけ聞きたいことがある。今日一緒にここまで来たあの男は何や」

「？」

呆気に取られるチエと他の二人。

「学校から一緒に帰って来た奴や」

「あんたウチの跡つけてきたん？」

「ワシの言うことに答えたらええんや」

「何であんたにそんなこと関係あんの」

「なんや、答えられへんのか」

外にタクシーの止まる音。コケザルの父親（勘九郎）と母親が血相変えて入ってくる。

「コケザル！ お前...」

7年ぶりに息子を見て絶句する父と母。

「今日は家に帰ったげなはれ」

ヨシ江が諭すように言う。

無言のまま連れられるコケザル。タクシーに乗りこむ親子三人。

見送るチエ、ヨシ江、そして謎のオバン。

## 第四章

---

「テツー、起きてるか」

病室の扉の前で叫ぶチエ。

左右の腕と左右の脚、胴体と頭に包帯を巻いてベッドに横たわっているテツの顔が一瞬輝く。

しかしチエが入ってきた瞬間、仏頂面になって横を向く。痛さで顔が歪む。

「テツー、どないしたん。こっち向きいな。ウチ、テツの顔見たいんやから」

「ええ歳して親をからかいやがって。いっぺんひどい目にあわしたるか」

「ウチ、お父はんにはよひどい目に合わしてもらいたいな」

「こりん奴っちゃんなあ...お前いつから病人いじめて喜ぶ性格になったんや」

「いじめてなんかないやん。せっかく見舞いに來たったのにその態度か」

「くっそー、ワシが逃げられへん思てへビの生殺しみたいにしやがって。

お前ますます嫌な性格になってきとるやないか」

「どうでもええけどこっち向きいな」

チエはテツの顔をつかんで、自分の方に向ける。目を反らそうとするテツを見つめてにっこり笑う。

「元気や元気や、顔見たら分かる」そしてさらに一言。

「今日からウチが下の世話したるから」

「なにー！ そんなことしたらワシ舌嚙み切って死ぬど！」

「...ホンマはずっと付き添いたいねんけど、ウチもこれで色々忙しいねん」

「別に付き添っていらんわい」

「せやけどウチが小学校の時、相撲大会で怪我して入院したときにはウチが面倒みたったやん

」

「アホ、あん時と今は別や」

「何が別やのん」

「お前がずっと部屋の中におると、ワシ何か落ち着かんのじゃ」

「何で？」

「...お前がワシの嫌いな奴に似てきよったからじゃ」

「嫌いな奴て、お母はんのこと？」

「とにかくワシは...」

「ウチにどうして欲しいん？ お母はん、テツがウチのことばかり言うからて...」

「...ワシ、お前には、もっとアホになって欲しいんじゃ」

「アホ？」

「お前、ちょっとくらい周りにチャホヤされてる思てええ気になるんやないど。

人間そういう時こそアホにならんといかんのや」

「どおいう意味？」

「お前、ガキの頃はもっとアホになってワシと一緒に騒いだやないか。

それが、高校なんか入ってからインテリ気取りになりやがって」

「ウチが高校受かったときあんなに喜んだくせに...

まあ、ウチが受かるかどうかでバクチして勝ったからやろけど」

「あのオバンと付き合い出してよけいにひどなったやないか...おかげでワシこんな目に」

「それとこれとは関係ないやろ...誰のおかげで入院してる思てるねん」

「関係あるわい」

「テツ、怒らんといて。ウチ、テツのこと好きや」

チエの顔にはいたずらっぽい微笑みが光っている。

「やめー！ 寒イボ立つわ！」

「ウチ、最近やっと、何でお母はんがテツのこと好きになったか分かってきたような気がするねん」

「.....どういう意味や」

「そのうち教えたるわ。じゃあ、ウチこれからガッコの試験あるからこれで」

「冷たい奴やなあ...」

「おらんでええゆうたんそっちの方やんか」

「ええわ、帰れ帰れ。ワシよりあのオバンの金の方が大事なんやろ」

「何？ もう一回ゆうてみ」

こういうときのチエの目に刃向かえる者はいない。

「わ、分かった、謝る...その親殺すような目はやめてくれ」

「ほな、また来るわ」

チエ、病室から出て行く。

残されたテツのさえない表情。

再びひょうたん池にて

「小鉄、コケザル何しに来よったんやろ」

「お前は どう思う」

「どう思うて...またなんか悪巧みにきまつてるやないか」

「ワシはそうは思わんな」

「ほな何や」

「お前ももう、年食い過ぎて年頃の男の気持ちに分からんか」

「なんや、チエちゃんにプロポーズにでも来たていうつもりか」

「まあそんなとこやろ」

「ませたガキやな...チエちゃんがコケザルなんか相手にするわけないやろ」

「モてる女のつらさやな」

「何がつらいねん。モてるのは女としてええことやないのか」

「まあワシらにはわからんでええことや」

「それにしてもこのところチエちゃんの周りにどんどん男が寄ってきとるな」

「まあ、男から見たらあんなええ子おらんやろ...テツの血ィ引いてるとこ除いたら」

「小鉄...お前もうチエちゃんの側におるの止めるゆうてたけど、あれどういうことや」

「ワシの存在はもうチエちゃんには必要なくなったてことや」

「なんでやねん」

「チエちゃんは貧乏なんかには負けん強い子やけど、ずっとコンプレックスに悩まされとった

。

それがもう克服できたんや」

「テツのことか」

「あのどうしようもない父親の存在を余裕を持って受け入れられるようになったんや。

もうチエちゃんには何の心配もない。ワシが側におる意味はなくなったのさ」

「お前ちょっとカッコつけすぎとちゃうか」

「今のチエちゃんに必要なのは...」

「男か」

「無粋な言い方するなあ...いずれにしても今は大事な時期や」

「悩み多きお年頃ゆうことやね」

お好み焼き屋「かたぎや」にて

「.....」

浮かない顔のコケザル。

「なんや、久しぶりに見た思たら難しい顔して」

「オッサン、何でチエの店つぶれたんや」

「いきなり来るなあ...ワシかて詳しいこと知らんけど、何か色々あったみたいやで」

「その色々が聞きたいんじゃ」

「まあ、つぶれたゆうより、あの家族で相談して決めたことやないのか」

「今やってる食堂は何やねん」

「あれは借りモンやろ」

「あのオバンの持ちもんか」

「オバンて...あの人、大阪でも有名な金持ちらしいで」

「ほんならあれかい、自分でやってた安物のホルモン屋つぶして、

金持ちのオーナーの店の従業員になったゆうことや」

「そんな他人の家の立ち上がったこと、ワシに聞かれても...」

「わからんな...たとえ地上げに遭うてもチエがあのお店手放すとは思えんし...」

「そんなに気になるんやったら本人に直接聞いたらええやないか。ワシはようせんけど」

「言われんでもそうするわい」

「それにしてもお前は今まで何してたんや。今戻ってきた理由はなんや」

「オッサンに言う筋合いのことちゃうやろ」店を出るコケザル。



「相変わらず生意気なガキやなあ……あー！ あいつお好み焼きの金払ってへんど！」

\* \* \*

西萩高校にて

「ヒラメちゃん」

「チエちゃん！」

「試験、できた？」

「どうやら…あんまりきかんといて」

「今日も絵エ描きに行くの？」

「うん、今度の文化祭に間に合わせんとあかんから。今からやらの完成せえへんもん。

ウチ、絵エ描くの遅いから」

「毎年ヒラメちゃんのは大作やからなあ…で、今年は何描くの？」

「そうやなあ…もう風景画も書き尽くしたし…そろそろ人物画にも挑戦しよかなあ」

「人物画…」

「ウチ、実はチエちゃんのこと描きたいなあて前から思ってたんや」

「ウチ！？」

「でもチエちゃん描いたら、誰かて綺麗な絵かけるわ。モデルがええもん！」

「そんなことない…」

「ウチ、東京の美大受けよう思てるねん。もしチエちゃん大阪におったら、離ればなれなるやろ。」

だからそれまでにいっぺん記念に描いときたいねん」

「……………」

「チエちゃんは進路のこととか考えてる？」

「うん…まだ考え中」

「大学は受けんの？」

「それもまだ分からへん…ウチ、ほんま行き当たりばったりの人生や」

「チエちゃんやったら受かる大学いっぱいあるわ。文章も上手やし…

よかったらウチと一緒に東京の大学行かへん？ ウチ、正直言って一人で東京行くの不安やねん。」

お母はんも兄ちゃんもそうゆうし」

「…でも店のこともあるしなあ」

「そうやね…ゴメンね、ウチの都合で勝手なこと…」

「ええねんええねん、それより久しぶりにお好み焼き食べに行かへん？

店開けるまでまだしばらくあるから」

「行く！」

## 第五章

---

ヒラメに指摘されるまでもなく、チエの最大の悩みは進路のことだった。

大学に行くという選択肢は確かに魅力的だった。

高校に入ってからチエは文章を書くという行為に目覚めていた。小学校のときに作文コンクールで入賞したこともあるチエだが、今では波乱に富んだ少女時代のエピソードをアクション小説(?)風に脚色して文芸部の雑誌に連載したり、エッセーを発表したりしていた。花井がそれを読んで、こんな才能があったのかと感心したほどの出来だった。

花井はチエの才能に半ば本気で惚れ込み、チエがその道に進みたいなら援助は惜しまないと言っていた。そのために大学に行く必要があるとは必ずしも思わないが、もっと勉強したいなら学費も花井が負担するつもりだとまで言った。もちろんチエは無心する気など毛頭なかったが。

陸上部の教師からは、本気で練習すれば一流のアスリートになれるとも言われた。高校でも、運動神経と足の速さでチエにかなう者は一人もいなかった。陸上部の選手の代わりに国体に出てくれと頼まれたこともある。実際、1年生のときに大会に出て優勝した。

しかし、チエは本気で運動選手を目指す気はあまりなかった。それが自分の進む道とは思えなかったのだ。陸上部の誘いもそれ以降は断っていた。

一度ミナミの街を友達と歩いていたときに、言葉巧みにモデルにスカウトされたこともあった(もちろん相手にしなかったが)。それ以外にも、雑誌社などがチエの店をよく取材に来た。目当ではもちろんチエの写真だった。そういうことはまったく趣味ではないチエだが、店の宣伝になるならと引き受けるときもあった。あまりにしつこいカメラマンをどついたこともある。雑誌を見て遠路はるばる店に来る客も多かった。

しかし、そうした出来事が、「ウチ、ひょっとしたら魅力的なんやろか」と密かにチエの自負心をくすぐったことも否定できない。こうしたことがみな、小鉄のいう「コンプレックスの克服」につながったことは事実であったろう。

チエは、店を続けるつもりだった。ヨシ江にだけ働かせて生活するわけにはいかない。店は地元の大学に通いながらでもできるとチエは思っていた。しかし、チエの中の何かが大学に行くことをためらわせるのだ...

\* \* \*

お好み焼き屋。

男が座っている。コケザルが店の前でチエと一緒に歩いているのを見た若者だ。年頃はチエと同じくらいだが、学校の制服は着ていない。なんとなく思い詰めた表情。持ってきたメモ帳を読みながら時々身体を振るわせたりする。

「なんや、今日は変わった客ばかり来るなあ...」

チエとヒラメが店に入ってくる。

「オッチャーん」

「おお、チエちゃんとヒラメちゃん、久しぶりやないか」

ドキッとした様子の男。

チエも男を見てドキッとする。

「なんや、もう来てたんか」

「チエちゃん、この人…」とヒラメ。

「今日、ヒラメちゃんに紹介しようと思ててん」

「…チエちゃん、この人と知り合いなん？」

「まあ…」心なしか顔を赤らめるチエ。

「オレやっぱり帰るわ」

男は言うが早いか、ダッシュで店を飛び出していった。

「チエちゃん、今の男…」呆気にとられる百合根。

「ウチ、あの人見たことある…有名な不良やん」

「不良なんか、あの男。なんや喧嘩強そうな感じはしたけど」

「でも最近この辺にヤーさんがおらんのはあの人のせいやて…」

「そういえば最近テツおらんにヤクザの姿見かけへんもんなあ」

ヒラメと百合根の話の黙って聞いていたチエが、ここで口を挟んだ。

「あの人不良とちゃうで」

その言い方があまりにきっぱりしていたので、他の二人は思わず黙ってしまった。

「チエちゃんごめん、何かウチいらんこと…」慌てるヒラメ。

「ええねん、気にせんといて。せっかく紹介しよう思たのに、逃げてしまうんやもん」

「そういえば関係ないけど、さっきコケザル来たで」

話題を逸らそうとする百合根。

「コケザルがどうしたん」

「えらいチエちゃん家のこと色々聞いてきたから、ワシ何も知らんゆうといたわ」

「なんや、気色悪いな」

「ところで、テツの具合どうや。回復しとるんか」

「まだ全身包帯巻いてるけど、元気は元気や」

「しかし解体された建物の下敷きになってまだ生きとるゆうのはいくらテツでも奇跡に近いな」

「アホや、つぶされる日のこと前からゆうてあるのにあの部屋で寝とってんから」

「オッちゃん、チエちゃんが高校入ったくらいからだんだんあの家に居づらくなってきたて…」

「そうや、ウチら引っ越すことにしたんも結局テツがごねたからや。

こんな狭い部屋で女二人と暮らしとったら頭おかしなる、ゆうて」

「でも引っ越してからはテツはホルモン屋の方に寝泊まりしとったんやろ」

「家でウチと二人きりになるのをえらい嫌がるねんもん」

「チエちゃんがからかいすぎたんとちゃうか。あの頃ワシとこ来てえらいボヤいとったで。

『チエの奴、父親のワシを誘惑しよるんじゃ』ゆうて。

(小声で) 周りの連中は羨ましがとったけどな...」

「いっぺんテツの前で着替えしただけやん」

「『チエには女としての恥じらいがない』ともゆうとったで」

「ウチには『もっとアホになれ』ゆうたくせに...」

すると、学生らしき連中が5, 6人ドヤドヤと店に入ってきた。チエの姿を見て、

「あれ西萩高の竹本やんけ」「誰か声かけろや」などとヒソヒソ言い合っている。

「あ、そろそろ店開ける時間や。ヒラメちゃん、出よか。オツちゃん、ほなまたな」

チエとヒラメは席を立ち、学生たちを尻目にそそくさと店を出る。

「チエちゃん、また来てやー...あ、そういえばあの若いもんの金は...」

コケザルに続いて3人も無銭飲食されたことに気づいた百合根は、この学生たちに「特別サービス」して元を取ろうと決めたのだった。

\* \* \*

病院から出てくるヨシ江。

コケザルが現れる。

昨日勘九郎からテツがここに入院していること、ヨシ江が毎日仕事帰りに見舞いに行っていることを聞き、出てくるのを待っていたのだ。

「コケザルちゃん？」

「.....チエに言うても聞かへんやろから、お母はんに聞いてほしいことあるんや」

「じゃあ、一緒に店行きましょか」

## 第六章

---

道々コケザルが話したことは、ヨシ江をかなり驚かせた。コケザルはこの7年間に自分が何をしてきたかを正直に話した。その詳しい中身は、ここには書かない。しかし、プライドの高い若者特有の誇張を割り引いて考えても、コケザルが相当危ない橋を渡ってきたことは確かだった。今の彼は、もう裏社会で生きていくしかないところまで深くそちらの世界に足を踏み入れていたのだ。店に入ってから話が続いた。

コケザルの話しぶりから、ヨシ江は彼のある決意を見て取った。コケザルはチエにプロポーズに来たのではない。別れを告げに来たのだ。しかしその前に一つだけ知っておきたい、と言った。

「チエには今つき合ってる奴はいるんですか？」

「さあ、どうですよ...そういうことは私には一切言わん子ですさかい」

「昨日一緒に帰ってたあの男は？」

「本人に直接聞いてみたらええのと違いますか」

そのとき、チエが店の戸を開けた。一緒にいたのは、昨日の若者だった。

「コケザル、あんた何でこんなところにおんねん」

と言ったチエの目はそれほど驚いてはいなかった。

さっきお好み焼き屋にいたことから、予想はしていたのだろう。

「お前こそ、その男誰や」

「あんたに関係ないやんか」

改めてその若者の顔を見て、コケザルは驚いた。見覚えがあったのだ。

しかしどこで会ったかは思い出せない。

「俺はヤクザは嫌いや」若者が言った。

「でもチンピラ気取りのガキはもっと嫌いや」

「なんやとこらー」

コケザルはいきり立った。勝負するつもりだった。

「やめとき、二人とも」

チエが二人の間に割って入った。

両者の睨み合いが続く。

\* \* \*

河会塾難波校。

模擬試験の結果発表を見るマサルとタカシ。

「マサル、またトップやないか、すごいなあ」

「当たり前やんけ」

「もう日本で入れへん大学どこもないわ」

「お前は相変わらずやな」

「俺のことはええんや。俺、マサルが東大受けるんやったら東京で入れそうな大学受けるわ。

それで、どこ受けるか決めたんか」

「まだじゃ」

「まだ、て...マサル何を迷ってるねん」

「俺、なんか大阪でやり残したことがあるような気がするんや」

「ひょっとして、マサル、まだチエのこと.....」

いつもなら「アホー！ 何ゆうてんねん。あんな奴のこと完全に忘れとったのに、思い出さすな！」と一発お見舞いするところなのだが、今日はなぜか言い返せない自分がいた。

いつのことだろう、マサルのチエに対する思いが、「多弁的攻撃錯乱型の歪んだ愛」（ジュニア談）から「本物の恋愛感情」に変わったのは？ 私立の中学に入って、チエに会えないストレスからノイローゼになったときには、本気で転校も考えた。しかしノイローゼから立ち直ってからは、チエのことは完全に忘れたはずだった。そのまま成績は順調に伸び、高校3年生の秋までは何の迷いもなかった。春にチエのホルモン屋がつぶれ、引っ越したことを聞いても何とも思わなかった。

ところが、つい1週間前、塾の友人たちと一緒に入った食堂で、チエが働いているのを見てから、マサルの頭と身体はおかしくなってしまったのだ。食堂にいる間は、お互い無視し合っていた。チエはマサルのこと気づいたが、マサルが完全にチエのことを無視したので、知らんぷりを決め込むことにした。友人たちがチエを横目で見ながら、「おい、ごっつ可愛い子やんけ」などと話しているときにも、気づかないふりをしていた。

店を出るとき、マサルは一瞬チエの顔を凝視した。それは、小学校のときとは別人のような美しさを身につけた少女だった。が、同時に、当時マサルを不思議に引きつけたのと変わらない凜とした雰囲気も漂わせてもいた。もっとも当時のマサルは自分がなぜそんなにもチエにこだわるのか深く自覚してはいなかったけれども――

マサルは一体チエの何に引きつけられていたのだろうか。それは一言で言って、マサルが持っていない、そして絶対に持つことのできない不思議な力の源、生活力とか土壇場でのパワフルな攻撃性となって発現するエネルギー或いは人格の力だったのではないか。その夜、そんなことをマサルはあれこれ分析してみたりした。

しかし、どう説明しようが、どう理屈をつけようが、要するにマサルはチエに今度こそノックアウトされてしまったのだ。その結果はノイローゼではなかった。チエの姿が寝ても覚めても頭から離れなくなり、チエのことを考えるたびに身体の奥がジーンとして、勉強も何も手につかなくなってしまうのだ。

「マサル...」

腰ぎんちゃくのタカシの声を尻目に、駅を降りたマサルの足は憑かれたように食堂「チエちゃん」を目指していた。

「あかん...俺もうはっきりさせんと、このままやおかしなまう」

何かに追いつめられたときのマサルの行動力には定評があった。

「チエに俺の今の気持ちを伝えるんや...どうなってもかまへん」

いつもなら開店している時間なのに、店のノレンはまだ出ていない。

しかし中に人の気配はある。

マサルは思いきって引き戸を開けた。

## 第七章

---

テツの病室。

見舞いに来たヒラメ。

「オッチャン、具合どう？」

「ヒラメー！ よう来たな。ワシ、お前が来てくれるのずっと待ってたんやど」

「そうゆうてもらえたら嬉しいわ。これ、回転焼き持ってきたから一緒に食べへん？」

「優しいなあ、ヒラメは。チエとは大違いや。ワシ、最近あいつのこと信用できひんからな」

「そんな...チエちゃんええ子やのに」

「お前もダメされたらあかんど。あいつ、あんな顔して金のことしか考えてないんやから」

「そうゆうたら、今日オッチャンに聞きたいことあるねん」

「なんや、あいつ高利貸しでも始めよったんか」

「違う...。オッチャンユキゆう子知ってる？」

「なんやそいつ」

「知らんのやったらええねんけど...」

「何や、ヒラメ何かワシに隠しとるやろ」

「別に...」

「アホ、顔見たら分かるわい。その汗はなんや」

「それは...」

「こら一、洗いざらい白状せい！」

テツの尋問が始まった。

「なにー！ チエの知り合い！！」

「有名な不良！？！」

「この辺のヤクザにケンカ売っとるやとー！！」

「ウチ、最悪のことしてるんとちゃうか...」

話した後で罪悪感に駆られるヒラメ。

「こら一！ 根性あったらワシに会うてみい！」

「チエと付き合うんやったらワシを殺してからにせえ！」

「ヒラメ、ちょっとチエとその男ここに呼んでこい。ワシが気合い入れたる」

「そら無理やわ...」

でもウチに紹介するゆうたくらいやからそのうちオッチャンにも紹介するんとちゃう」

「アホー あいつワシに会わせたくないから陰でコソコソ付き合うとるんやないか」

「ワシが動かれへん間にどんどん不良になりやがって...」



「それで最近見舞いにもあんまり来えへんかったんか...」

ブツブツ独り言を言うテツ。

「あと、コケザルゆう子が戻ってきたん知ってる？」

「なにー!あのサルもグルか!!」

「あの子は関係ない思うけど...」

「あかん、ワシおらん間にどんどん状況悪なってる。

ヨシ江のやつワシにちょっとも言いやがらんと...あいつもグルやな」

「オッチャン、気ィ悪せんといて...チエちゃん、オッチャンには話してる思たから」

「ヒラメ、ワシ退院する。こんなところでシヨンベン垂らして寝てる場合やない」

「退院するて...こんな身体で」

「表行ってカルメラとお好み焼き屋呼んでこい! 早よ!」

\* \* \*

花井の家。

花井拳骨、チエのオバアはん、そして謎の「オバン」が三人で座卓を囲んでいる。

花井「せやから...ワシとしては、チエちゃんには、周りに気ィ遣わんと自分が一番やりたいことをやってもらいたいんや」

オバアはん「そらわたいも同じですわ。あの子、小さい頃から子供らしい生活もさせてあげられんと来ましたさかい、せめてこれからはやりたいようにやらしてあげたい思うんですわ」

謎のオバン「ワタシ、チエちゃんは何やっても大成する素質のある子や思います。

一生ホルモン焼き屋や食堂のおかみさんで終わるには勿体無い子ですわ。

だから、差し出がましいとは思いましたが、あのホルモン屋買い上げたり、今の食堂貸したりさしてもらいました。今の店も一時のもんや思ってます。

チエちゃんがどうしても働きたい言うもんやから、貸してあげただけの話ですわ。

でも、何するにせよ、本格的に一つの道に打ちこむには、いつまでも店と両立することはできまへんやろ」

花井「テツはともかくとして、ヨシ江はんの意見はどないなんやろ」

オバアはん「そろそろ来る頃や思いますから、直接聞いとくんははれ。わたいは特に異存はおまへんから」

謎のオバン「ワタシ、去年の今頃、高校の教師やってる息子が持ってた文藝部の雑誌でチエちゃんの文章読んだ時、この子は一体どんな子なんやて、えらい興味持ったんですわ。

早速息子に住所聞いて店を訪ねました。働いている本人に会うてみて、いっぺんに惚れ込んでしもたんですわ。ワタシも色々な人間見てきましたけど、あんな経験は初めてでした。いまどきの子に、あんなに大きな器がおるとは思いも

しませんでしたからなあ。とにかく人間のことをよお知っとる。人を見抜く確かな目があって、誰でも自分の思うように操ってしまう。まったく末恐ろしい子でしたけど、何より惚れたのは、あれだけドロドロした人間たちの中で暮らしながら、キレイでシンから純粋な心を持ちつづけることでした。

後でチエちゃんのお父はんとお母はんに会って、その理由がよく分かりましたけどな。

ワタシ、そのときに決めたんですわ。ワタシの残り少ない人生をこの子に賭けてみよう、この立派な子を世間のアホな大人たちに見せつけたるのがワタシの役割なんや、て」

花井「千春はんとはワシも昔からよお知っとる仲やけど、いつかチエちゃんのことを紹介したろ思ってたんや。こんなに惚れこまれるとは正直思とらんかったけどな」

オバアはん「それにしても今度のテツの病院の紹介から入院費から介護までお世話になりっぱなしで、ホンマ穴があったら入りたいくらい申し訳ない思てますんや」

オバン（千春）「ああ、あれは完全にこっちの責任ですさかい、一切気にせんと」

花井「しばらくテツおらんようになって、ワシら大いに助かっとるんや ハハハ」

オバアはん「ホンマ、あの男がおったら、まとまる話も全部ぶち壊しですからな」

花井「それにしてもヨシ江はん、ちょっと遅いな。何かあったんやろか」

花井渉（拳骨の息子）が慌てた様子で部屋に駆け込んでくる

「お父さん、今、ヨシ江さんから電話が...」

花井、オバアはん、千春「なにー！！ テツが逃げた！？！？！」

## 第八章

---

ひょうたん池。

小鉄「.....それで、マサルが入ってきてどうなったんや」

ジュニア「その“ユキ”ゆう奴とコケザルが一触即発の状態で見合ってるときに、いきなり入ってきて、涙声で『チエ！ワシの気持ち聞いてくれ』なんて言うもんやから、いっぺんに場の空気がシラけてしもたんや」

小鉄「とんだ水入りやな」

ジュニア「結局あいつが出て行って、チエちゃんが店始めなあかんゆうて準備しだしたら、コケザルとマサルも物言いたげなカオしながら帰っていきよったわ」

小鉄「その調子やと、すぐに第2ラウンドがありそうやな...チエちゃん今日は何しとるんや」

ジュニア「学校休みやから、病院から逃げたテツ探しとるんとちゃうか」

小鉄「ややこしいときに、一番ややこしい男が出てきたなあ」

ジュニア「ますますおもしろなってきたやないか」

小鉄「アホ、喜んでる場合ちゃうど。これは、最後にもう一仕事せなあかんかもしれんな」

ジュニア「きたー！ これや、このときを待ってたんや。あの頃みたいに二人で...あの頃みたいに...」

小鉄「けど今度の話はそないに単純やないど。余計な手出しは禁物や」

ジュニア「そのへんは小鉄センスの言うとおりにやらしてもらいます」

\* \* \*

西萩町内のどこか。

全身に包帯を巻いて担架の上で座っているテツ。担架を運ぶカルメラ兄弟。その後をついて歩く百合根。

テツ「こら一、どこにおるんじゃー！ 根性あるんやったら出て来いー！」

「このへんにおるのはわかっとるんやどー！」

「オッさん、顔知っとるんやろ、見つけたらすぐゆえよ」

百合根「ヒラメちゃん、有名な奴やゆうとったけどなあ...」

カルメラ兄「テツちゃん、ワシら疲れてきたわ」

カルメラ弟「こんなことしてて見つかるわけないやんか」

兄「出てくるなゆうてるようなもんや」

弟「チエちゃんに直接聞いたほうが早いんとちゃうか」

テツ「やかましい！ ゴチャゴチャ言うヒマあったらちゃんと探さんかい！

ワシが見つけて根性入れなおしたるんじゃ」

カルメラ兄「せやけど、このへんでヤクザにケンカ売ってる学生なんて聞いたことないど」

カルメラ弟「チエちゃんがそんなチンピラみたいな奴と付き合ってるとは思えんけどなあ」

兄「オッさん、どんな奴なんや」

百合根「ワシも一回見ただけやから、よう覚えてないわ。でも中々ええ男やったような気はするで」

テツ「何がええ男じゃ、女たらしが…。ワシの一番嫌いなタイプや。見つけたらタダではすまんからな」

百合根「お前そんな身体で何ができるねん」

テツ「まずお前らがどついて、羽交い締めにしたところを噛み付いてズタズタにしたるわい」

カルメラ兄・弟・百合根「こわー」「なんちゅう親や…」「ケダモンでもそんなことせえへんわ」「ワシら止めさせてもらうで」

\* \* \*

食堂「チエちゃん」の店内。表の戸は開いている。

チエ、ヨシ江、オバアはん、オジイはん、花井、千春。

皆無言で重苦しい雰囲気。

ミツルが入ってくる。

ヨシ江「見つかりましたか、うちの人…」

ミツル「いや、心当たりのところは全部当たったんですけど…」

チエ「テツの行くところなんか大体決まってる。お好み焼き屋のオッチャんのところか、カルメラのオッチャんのところや。どっちにも誰もおらへんところ見たら、あの人ら連れてそこらへんウロウロしてるんやろ」

オバアはん「まったく、あのアホ、あの身体でどこをフラフラしとるんや」

チエ「そのうち絶対ここに来るはずや。ウチ、確信あるねん」

花井「でも、なんで逃げよったんかな」

ヒラメが沈みきった様子で現れる。

ヒラメ「チエちゃん、ウチ……」

チエ「ヒラメちゃん、どうしたん？」

ヒラメ「ウチが悪いねん…ウチがオッチャんにいらんこと喋ったから…」

チエ「それ、どういうこと？」

泣き崩れるヒラメ。

……………

オバアはん「間違いおませんわ。テツ、そのユキゆう子探しとるんですわ」

千春「ところでチエちゃん、その彼はどんな人ですんや。ヨシ江はんは知ってる人なんですか」

ヨシ江「いえ、わたしは…」

チエ「こないだお母はんを紹介しよう思て連れてきたんやけど、ややこしいことなりそうやったから帰ってしもたんや」

花井「この際やから、みなに教えてくれんか。その男とは付き合うとるんか」

オバアはん「チエが選んだ人やったら、わたい100%信用しまっせ」

オジイはん「ワシもや」

チエ「.....付き合ってるゆうのとは違うけど...」

千春「ええ友達ゆうとこですか」

チエ「うーん.....友達というか...」

何となく言いにくそうなチエ。

ここで少し解説が必要だろう。実はチエがユキを知ったのはつい最近のことなのだ。2, 3ヶ月前、テツがホルモン屋解体の下敷きになって入院して以来、チエの周囲にだんだん質のよくない連中が寄りつくようになってきていた。も

ちろんそんな連中に負けるようなチエではないし、乱暴に近寄ってくる男たちなら簡単に撃退できたが、ストーカーまがいの男たちに付きまとわれて、身の回りに怪しい雰囲気を感じる時もあった。物陰からチエの写真を盗み撮りしようとする者さえ現れた。

敏感なチエはそうした動きをいち早く察知して相手の裏をかくような行動を取ったりもしていたのだが、陰湿な連中のしつこい追跡にいささか辟易し、入院したばかりのテツの看護と仕事で忙しいヨシ江に相談することもできず、次第に疲れ果てていたのだった。

そうしたときにいわばチエの「シークレット・サービス」の任を買って出たのが「ユキ」だったのだ。もっとも、表立ってチエにそう告げたわけではない。

待ち伏せしたりカメラを隠し持っていたりする連中がチエに近づく前に追い払っていたのだ。チエは最初そのことを知らなかった。ある日、ユキがストーカーからカメラを取り上げているのを発見したチエが、何をしているのかを尋ねたときに彼が訳を話すまで気づかなかったのである。チエは知らなかったのだが、ユキはミナミ界限ではかなり知られた存在だった。年齢はチエと同じだったが、高校には通わず、ヤクザから店などを守る用心棒のようなことをしていた。そのことから、格闘技に関しては相当な腕の持

ち主と推察される。しかしさまざまな評判のわりには、彼がケンカしているところを見た者はいなかった。どういう人間なのか、何の理由でそんな生活をしているのかも誰も知らなかった。チエは、なぜ自分を守ってくれるのかを尋ねたが、ただ怪しい奴を捕まえているだけだと言ってそれ以上ははっきりしたことは答えなかった。好奇心半分に、色々と話しかけても、自分のことは中々話そうとしない。しかし、今の世の中

がおかしいとか、不景気で困っている人がたくさんいるとかいう話になるとわりと饒舌になった。世の中のことや社会のことについて、チエの知らないことをずいぶん知っていた。

そうこうしているうちに、学校の帰りなど自然と待ち合わせして、一緒に帰るようになっていた。チエは店があるしテツの見舞いもあるので、喫茶店でゆっくり、というわけにもいかず、ただ二人で店（家）まで歩くだけだった。

そんなある日、ユキがチエの店を手伝いたいと言い出した。給料はいらない、皿洗いでも何でもするから働かせてくれというのだ。変なことを言うなあ、とは思ったが、一度ヨシ江に相談してからということで、その日は別れた。コケザルが見たのは、そのときの光景だったのである。

\* \* \*

場面は変わって

ひょうたん池。

ユキとコケザルが少し離れて向かい合って立っている。

遠くからテツの一行がこちらに向かって進んでくるのが見える。

ジュニア「小鉄、あいつや、あいつがユキや」

小鉄「……………」

腕を組んで見守る小鉄。

## 第九章

---

ひょうたん池のほとり。

サシで睨み合うコケザルとユキ。

コケザル「見覚えのある顔や思たら、思い出したわ。お前ミナミで『寸止めのユキ坊』て呼ばれてる奴やろ」

（ジュニア「迫力のない名前やなあ...」）

（小鉄「けど、あいつ、アマチュアやないど」）

ユキ「年下の奴からそんな風に呼ばれたないわ」

コケザル「何でお前みたいな奴がチエのそばにまとわりついとんねん」

（ジュニア「なんや、あいつ、チエちゃんのストーカーか」）

ユキ「別に好きでやっとなんやない」

コケザル「嘘つけ！」

ユキ「お前こそ、ガキのくせに、このままやと一生カタギに戻れんようになるぞ」

コケザル「もう腹くくっとるわい。とにかくワシ、お前と勝負つけんと気がすまんのじゃ」  
言うが早いか、コケザル、ユキに飛びかかる。

次の瞬間、宙に舞うコケザル。頭から地面に落下する。

「くそー、負けるかい」

再び突撃。身をかかわされ、あえなく転倒。落ちていた棒を持って飛びかかるが、打ちこんだところをつかまれ、再び投げ飛ばされる。

（ジュニア「おい、強いな、あいつ」）

（小鉄「コケザルの敵やないやろ」）

それでもつかみかかるコケザル。その度に投げ飛ばされ、まるで相手にならない。

テツの一行が二人を発見し、近づいてくる。

テツ「こらー！ 見つけたどー！ ケンカやったらワシらもまぜんかい！ カルメラ、突撃やー！」

カルメラ兄「なんでワシらがケンカせなあかんねん...」

カルメラ弟「ええかげん安定した暮らし取り戻したい...」

小鉄「おいジュニア、ちょっとあれ黙らしてこい」

ジュニア「この場面にアホは必要ない...なんや、うちとこのオヤジもおるやんけ」

ジュニア、一行に向かって駆け出し、棒でテツの頭をどついて気絶させる。

百合根「ジュニア！」

カルメラ兄「おい、あれコケザルとちゃうか」

カルメラ弟「すると相手は...」

ボロボロになったコケザル、ユキにしがみつきながら

「お前なんか...お前なんか...」

ユキ「...お前、そんなにチエのことが好きか」

意識が朦朧としてきたコケザル、そのまま地面に崩れ落ちる。

\* \* \*

再び食堂。

花井「これ以上ここで待ってもテツ来るかどうか分からんで」

オバアはん「わたい探しに行ってきますわ。巻き添え食ってるカルメラはんらが気の毒や」

オジイはん「ワシも行く」

千春「チエちゃん、どこか心当たりはおませんのか」

チエ「絶対ここに来る思うねんけどなあ.....」

そのとき――

カルメラ兄弟「こんにちはー テツちゃんお届けに上がりましたー」

カルメラ、気絶したテツを担架に載せて現れる。百合根が後に続く。

チエ「テツー！」

ヨシ江「あんた！」

オジイはん「テツー！どないしたんや」

花井（テツの脈を取りながら）「大丈夫、気絶しとるだけや」

百合根「すまへん、うちのジュニアが...」

千春「とりあえず病院へ...タクシー呼びましょ」

騒ぎが一段落したところへ、ユキがコケザルを背負って現れる。

チエ「ユキ！」

ユキ「.....こいつ、俺の代わりにこの店で働かせてやってくれ」

と言いながらコケザルを座敷に寝かせる。

チエ「コケザル...」

ユキ「じゃあな」

呆気に取られる一同を尻目に、店を出て行くユキノブ。

チエ、追いかけてしようとするが、入れ替わりに入ってきたマサルの母親につかまる。

マサルの母（すごい剣幕で）「チエちゃん！ あなたうちのマサルに何をしたの！」

チエ「??？」

マサルの母「昨日の夜、帰ってきてからあの子、寝込んでしまって、うわごとのように『チエー、チエー』って繰り返してるのよ！」



チエ「マサル...ちゃんが？」

マサルの母「あなたまさかマサルに変なこと...多感な年頃の男の子なんだから、刺激するのは止めてちょうだい。あなたと違ってあの子はそういうことにはナイーブなんだから」

チエ「ウチ知りません、何の心当たりも...」

(「そういえば、ゆうべ思いつめたような顔で店に入ってきたな...」)

マサルの母「とにかくあなたのせいなんだから、今すぐ家に来て何とかしてちょうだい！」

タカシが入ってくる。

タカシ「チエー マサルが...」

チエ「ウチ関係ないやん」

タカシ「そんなことゆわんと、これ読んだってくれ」

と言ってチエに分厚いノートを渡す。

チエ「何これ？」

タカシ「マサル、一週間前から徹夜でこれ書いとったんや。チエに会ったら何ゆおうか考えとったんや。オレ、今マサルから、直接会われへんからこれ渡してくれて...」

チエ「また昔みたいに悪口書いてあるんとちゃうやろな」

タカシ「違う！ マサル、ホンマは昔からチエのことが好きやったんや。でも、昔はそのことに気づいてなかったんや」

チエ「.....」

タカシ「オレ、さっきこのノート、チラッと見てしもたんやけど、悪口なんか一個も書いてなかったど。なんか、恥ずかしくてここではゆえんような文句が一杯...」

チエ「なんかそれ聞いただけで背筋サムなってきたわ」

タカシ「頼む！ マサルの命助ける思てこれ読んだってくれ」

チエの手に押しつけるようにノートを渡し、マサルの母と一緒に出て行くタカシ。

チエ「そんなことゆわれてもなあ...」

「モてる女は辛いなあ、チエちゃん」と笑いながら声をかける花井。

ジュニア「女ゆうのは罪作りな生きモンやなあ」

小鉄「チエちゃんは特別や...」

ジュニア「『魔性の女』ゆうやつか」

小鉄「どっちかゆうたら『運命の女』やろな」

## 第十章

---

ある駅のホーム。テツとチエの二人がベンチに腰掛けている。

チエ「テツ……ウチ、ずっとだまっててんけど、実はウチ、子供おるねん」

テツ「子供？」

チエ「紹介するわ。ユキ子、こっちおいで」

小さい頃のチエにそっくりな少女が現れる。

テツ「可愛い子やな…お前似か」

チエ「それで、テツ、これからどこで暮らすつもり？」

テツ「どこで、て…お前らと一緒にあったらあかんのか」

ヨシ江「今の家はもう一杯ですさかい、どこかに移らんとあきませんな」

テツ「チエ…、ヨシ江…お前らワシを見捨てるんか」

ホームにリヤカーが入ってくる。引いているのはオバアはん。

チエ「ユキ子、何してんの、はよ乗りや」

ヨシ江「はよ行かな、センセに怒られますわ」

テツも乗りこもうとするが、リヤカーは出発してしまう。ホームから落ちてしまうテツ。

「わー！ 落ちるー！ チエー！ チエー！ ワシ怖いー！ 死ぬー！ 助けてくれー！  
チエー！」

「チエー！ 落ちるー！ ワシどないなるんやー！ ワシも乗せてくれー！」

「チエー！」

「うるさいなあ…」

病院の、テツが寝ているベッドの脇にいるチエ。

ベッドから落ちそうになったテツの身体を支えている。

テツ、目を覚ます。

チエ、テツの顔を覗き込む。

「チエー！ 見捨てんといてくれー！」

思わず叫ぶテツ。

チエ「なに寝言ゆうてるねん。じっと寝てられへんのか、全身包帯巻いてんのに」

テツ「お前、子供とヨシ江と一緒にリヤカー乗ってどっか行こうとしたやろ」

チエ「何ゆうてるんや。子供てなんや」

テツ「せやから、お前…その…子供がおるんとちゃうんか」

チエ「アホか！」（「テツの身体がマトモやったらどついてるところや…」）

テツ「お前、早まって子供なんか作ったら後悔するど」

チエ「人聞きの悪いことゆわんといて！」

テツ「ワシ、お前のこと心配したってるんや」

チエ「助けてくれとか見捨てんといてくれとかゆってたくせに...」

テツ「ヒラメから聞いたんやど。お前、ワシが入院してる間にどんどん不良になっ取るやないか」

チエ「何の話や」

テツ「あー！ 思い出した！ チエ、お前、不良と付き合うとるやろ！」

チエ「病院であんまり大きい声出さんといて」

テツ「ヤクザにケンカ売ってる学生なんかロクなもんやないど」

チエ「どんな話聞いたんや」

テツ「ヒラメが、お前のこと心配してワシに相談しに来よったんや」

チエ「何でも自分に都合よく解釈するなあ...」

テツ「とにかく、早よそいつここに連れて来い。ワシが根性入れたる」

チエ「あのなあ...」

テツ「チエ...それで...これは...ちょっと聞きにくいんやけど、親として聞かせてもらうで」

チエ「なんや」

テツ（うつむきながら恥かしそうに）「だから、その...そいつとは...ど、ど、どこまでいったんや」

チエ「何を言いだすねん！！！」（真っ赤になって思わずテツの頭をどつく。）

テツ（目を回しながら）「なにするんじゃー！ ワシ重病人やど」

チエ（病室を出ながら）「あかん、ウチ、ここにおったら理性なくしそう...」

正気に返ったテツ、ベッドの脇に置いてある分厚いノートを拾い上げる（この時には右手のギブスはもうとれていたので）。

「なんやこれ？」

パラパラとノートをめくり、中身を読み始めるテツ。

\* \* \*

病室を出たチエ、ロビーでオバアはんと出くわす。

チエ「オバアはん」

菊「チエ、ご苦労さん。そろそろ交替しますわ。ずっとチエに付き添わせてしもて、悪いことしましたな」

チエ「かまへんねん、今ガッコ試験休みやから」

菊「でもたまには店に顔出さな、客減りまっせ」

チエ「店の方はどう？ コケザル、ちゃんと働いてる？」

菊「意外に一生懸命やってまっせ。客相手の仕事はヨシ江はんがやってますさかい、掃除と皿洗い専門ですわ」

チエ「どういう風の吹き回しやろ」

菊「それより助かるのは、千春はんがずっと店手伝ってくれてますのや。わたい、やめとくんははれて頼んだんだすけど、やるゆうて聞きまへんのや」

チエ「オバちゃんが...」

菊「申し訳ないことですわ。テツの入院かて、千春はんの世話になりっぱなしで、わたいらが付き添い手抜きしたばっかりにこないなことになったのに、丸うおさめてもろて...」

チエ「.....」

菊「わたい、最初あの人のこと、高利貸しやとか地上げ屋やとか思たりして、失礼な態度取ったことホンマ後悔してますんや。あの人、心底からチエの力になりたいと思てはるんやゆうこと、最近やっと分かってきましたのや。せやな

いと、ここまで親身になってうちらみたい家族と付き合うてられませんわ」

チエ「せやけど、オバちゃん、ウチらのどこがそんなに気に入ったんやろ」

菊「そのへんはわたいにもよう分かりまへんけど...あの人、花井はんの知り合いですからな。そないに見る目のない人でもおませんやろ」

チエ「そうかな」

菊「こないだも、チエのことええ子やええ子やゆうてましたで。チエのお父はんとお母はん見てその理由がよう分かったて」

チエ「.....」

菊「まあ、チエは、人の好意は素直に受けといて大丈夫と思いまっせ。何せこれまで苦勞の連続でしたからなあ」

チエ「ウチ、今思えばそんなに苦勞でもなかったゆう気がするわ」

菊「過ぎたことは誰でもそう思いますんや。チエも、これからも色んな苦勞がある思いますけど、後になれば笑い飛ばせるようなことがほとんどや思たら、

何とかやっついていけるもんですわ...じゃあ、わたい、テツのとこ行ってきますわ」

チエ「ありがとう、じゃあ、また後で」

チエ、病院を出る。

「オバアはん、最近だいぶ人間丸なったみたいやけど、大丈夫やろか...そろそろ危ないんと...」

そのとき、テツの病室の窓からオバアはんの声が聞こえた。

「テツー！ 何してますんや！」

「そやけどお母はん、これ...」

「ええから貸しなはれ！」

「ハハハ、まだまだ大丈夫や」と安心するチエ。

しかし次の瞬間、チエの全身の血の気が引いた。

「マサルのノートや！！！」

「テツー！！ オバアは一ん！！ そのノート返してー！！」

\* \* \*

ひょうたん池のベンチ。

ヒラメ「それで、そのノート、何て書いてあったん？」

チエ（顔を赤くしながら）「恥かしくて、こんなところでゆわれへんわ」

ヒラメ（顔を赤くしながら）「そんな恥かしいこと？」

チエ「ま、まあこうゆうのはプライバシーに関わることやから...」

二人とも沈黙。

ヒラメ（独り言のように）「マサルでも人を好きになるんやなあ...」

チエ（独り言のように）「唯一の救いは、テツには意味が分かってなかったゆうことや...」

タカシが現れる。

「チエ...あれ読んでくれたやろな」

チエ「全部は読んでへんで」

タカシ「実はもう一つ頼みがあるんや」

チエ「？」

タカシ「このノートに、マサルからの質問が書いてあるから、明日までに答えて欲しいんや」

チエ「明日まで、て...」

タカシ「ほな、明日またノート取りに来るから、それまでに書いといてくれよ」

チエ「ちょっと...」

タカシ「頼むで一」（と言って立ち去る。）

ヒラメ「ちょっと、そのノートなんやのん。言いたいことあるんやったら直接ゆうたらええやんか。『ボク、チエちゃんのこと愛してますー』て」

チエ「この方がマサルらしいわ」

ヒラメ「それにしても、チエちゃん、ホンマにモてるんやなあ」

チエ「え？」

ヒラメ「ウチ、チエちゃんがモてるのは当たり前や思うし、自分のことみたいに嬉しいとも思ってたんけど、正直、マサルがチエちゃんのこと好きやったゆうのはショックやってん」

チエ「ウチかてショックやったで」

ヒラメ「でも、チエちゃんのはどっちかゆうたら嬉しいショックやろ」

チエ「そうかなあ...」（「ちょっと気色悪かったけど...」）

ヒラメ「せやけど、ウチ、それ聞いたとき、なんか暗ーい気持ちなってん。天はニブツを与えず、ゆうのやっぱりウソや、世の中て不公平にできてるんや...て」

チエ「ヒラメちゃんかて絵の才能あるやん。ウチ全然あかんけど」

ヒラメ「それだけやん」

チエ「そんなことない...」

ヒラメ「ええねん、チエちゃん、気ィつかわんといて。事實は事實として受け止めなあかんねん。ウチ、最近そういう本読んでるねん」

チエ「別に気ィつこてるわけちゃうけど...」

ヒラメ「あかん、なんかマイナス思考なってる。こういうときは、寝るのが一番ええねん。ウチ、ちょっと帰って寝るわ。チエちゃん、ほなさいなら」（立ちあがる）

チエ「うん、さいなら...」

（ジュニア「複雑な乙女心やなあ」）

（小鉄「人それぞれに悩みはあるのさ」）

\* \* \*

ヨシ江はん、仕事から帰ってくる。

食堂「チエちゃん」の前に、勘九郎（コケザルの父）の姿が。

ヨシ江「勘九郎さん」

勘九郎「あっ、ヨシ江はん」

.....

奥の座敷で話し込む勘九郎とヨシ江。

チエ「ただいまー、あ、勘九郎のオッチャン」

.....

勘九郎「ホンマ、チエちゃんとヨシ江はんには感謝せなあかん思てますんや」

チエ「でもウチ、何もしてませんから」

ヨシ江「わたしも何も...」

勘九郎「いや、そんなことないですわ。あいつ、あの日帰ってきてから、心入れ替えてチエちゃんの店明日から手伝うゆいましてん。きっとチエちゃんが真面目に働いてるの見て、あいつなりに何か感じたんですわ。...足手まといや思

いますけど、ひとつ我慢して使ってやってください」

ヨシ江「いえ、こちらこそ助かってますさかい...」

勘九郎「あいつ、自分からあんなこと言い出すなんて...ホンマ、ワシ嬉しくて...」

嗚咽がこみあげる。机に突っ伏して泣き出す勘九郎。

チエ（「ホンマに心入れ替えたんやろか...」）

（「あれは基本的にテツと同じタイプやからな、心入れ替えたゆうた後の方がタチ悪いねん。ちょうどええわ、今日店に来たら確かめてみたら」）

（「それにしてもあの日、何でユキがボロボロのコケザル背負ってきたんやろ...二人でケンカした後やったんとちがうか」）

（「...ユキ.....。」）

\* \* \*

その頃、ひょうたん池では...

携帯電話で何やら連絡をとっているコケザル。隣には大柄で屈強そうな男。

(小鉄「おい、コケザル何独り言ゆうとるんや」)

(ジュニア「あれはケイタイゆうんや。オレも実物は初めて見たわ」)

コケザル「じゃあ、今すぐ頼むで。西萩のひょうたん池や」(電話を切る)

隣の男に話しかける。

コケザル「今金剛も呼んどいたからな。三人でかかればなんとかなるやろ」

屈強そうな男「せやけど、そんなに強いんか。名前は聞いたことあるけど」

コケザル「アマチュアでないことは確かや。ワシかてケンカには相当自信あったけど、過去七年で初めての完敗やったんや。(ここから独り言のように) くそー、ワシ七年もただ遊んでたわけやないど...もっと強い奴がおるんやゆうこ

とあいつにも分からしたるんや」

男「ワシ、最近強い奴に飢えてるんや。その『ミナミの狼』ゆうのとは一回勝負つけたかったからちようどええわ...で、勝ったらホンマに百万くれるんやろな」

コケザル「当たり前や、ハッターリゆうてどないするんじゃ。お前に百万、金剛に百万や」

男「殺してもええんか」

コケザル「それは場合によるな」

(ジュニア「百万て、コケザルてそんな金持ちなんか」)

(小鉄「いや...これはなんかあるな」)

\* \* \*

再び食堂。

チエ「コケザル遅いな。勘九郎のオッチャン帰ってしもたわ」

ヨシ江「いつもやったらもう来てる時間ですけどな。何か用事でもあるんですやろ」

チエ「なんかイヤな予感するな...」

ヨシ江「え？」

チエ「あかん、ウチこういうことにメチャメチャ敏感やから、疲れるときあるねん」

ヨシ江「考えすぎと違いますか。あんた、よう気のつくのはええとこですけど、時々気ィ回しすぎることもありますからな」

「それもあんたのええとこやけど、お母はんにもまで気つかわんでええんよ」

チエ「え？」

ヨシ江「ユキさんのことですわ」

チエ「.....」（赤くなってうつむく）

ヨシ江「ええ人やないですか。お母はん、会うてみてホンマにそう思いましたで」

チエ「！？ お母はん、ユキに会うたん？」

ヨシ江「お父はんが病院に戻った次の朝、訪ねてきてくれたんですわ。コケザルちゃんのことえらい心配してましてなあ。この店で働かせたってくれて頼みに来たんですわ」

チエ「...ウチのこと何かゆうてた？」

ヨシ江「チエとどうやって知り合いになったか話してくれましたわ...あんた、私の知らんところでずいぶん大変やったみたいすな」

チエ「...それで？」

ヨシ江「しばらく留守にするけど、戻ってきたらチエに会いに来るゆうてましたで」

チエ「留守？」

「優しそうな子でしたわ。目エ見たらどんな質（タチ）の子か分かる」

いつのまにか入って来た千春が口を挟んだ。

チエ「オバちゃん、来てたん」

千春「クルマで材料運んできましたんや。運転してきたわけやおまへんけどな」

ヨシ江「本当にすみません、毎日毎日...」

千春「それよりコケザル、まだ来てませんか」

チエ「やっぱり三日坊主やったんやろか」

千春「昨日私にゆうたあの言葉は何やったんですやろなあ」

チエ「コケザル、オバちゃんに何かゆうたん？」

千春「ゆくゆくは自分で店持ちたいから、資本金融通してくれゆうてきたんですわ」

チエ・ヨシ江「！」

チエ「二日か三日店手伝うたくらいで何ゆうてるねん...やっぱりテツと一緒にや」

ヨシ江「それで、どうゆう返事を...」

千春「分かった、あんたが本気やったら一億でも二億でも用意する、ゆうたりましたけどな」

チエ「そんなメチャメチャな...」

千春「心配おまへん、いきなり店サボるような男に金なんか渡せまへんわ。あの子、未成年のくせに変にスレて、世の中なめたようなところありますからな。いっぺん痛い思いさせんとあきませんのか」

ヨシ江（チエに小さな声で）「なんか意味がよう分かりませんわ」

チエ「ウチも...あのオバちゃんのゆうことはときどき理解できんことあるから」

\* \* \*



再びひょうたん池。

池のほとりに立つ、コケザルと連れの男。

遠くの方からユキが近づいてくる。

コケザル「やっぱり来よったな...」

男「あいつか」

(ジュニア「おい、第3ラウンドの始まりやな」)

(小鉄「今度こそホンマにワシらの出番かもしれんな...」

ジュニア、ウォーミングアップしといた方がええど)

## 第十一章

---

コケザル、こちらにやって来るユキを見つめながら隣の男に一言。

「ワシが合図するまで手エ出すなよ」

ユキ、近づいてきてコケザルの前に立つ。

しばらく無言でにらみ合う二人。

コケザル「こないだはよおやってくれたなあ」

「おまけに就職の世話までしてもうて、ありがたいこっちゃ」

コケザルは口の端を歪めながら、悪魔的な微笑を浮かべる。

「せやけどそれはそれ、これはこれや。ワシはやられたらやり返さな気がすまん質でなあ。

悪いけど、こないだの分は返させてもらうで」

ユキ「そのつもりできたんや」

コケザル「何？」

ユキ「俺をどついて気がすむんやったら、なんぼでもどついたらええ」

(ジュニア「昔のお前みたいなことゆうとるな」)

(小鉄「.....」)

ユキ「けど、隣のチンピラは邪魔や、どかせえ」

男「なんやとこらー！ 能書きはええからさっさと来いや！」と叫びながらユキに飛びかかる。

「やめー！」と叫ぶコケザル。

ユキ、男の手をねじ上げる。その場にへたり込む男。

「くそー...」

男、抵抗を試みるが、投げ飛ばされる。

ジュニアがすかさず跳びかかり、男の頭を殴って気絶させる。

コケザル、ユキに跳びかかる。二人、もつれあって倒れ、コケザルがユキに馬乗りになる。

コケザル、ユキの顔にパンチを浴びせる。

ユキは、抵抗せず黙ってコケザルを見つめている。

「カッコつけんと、根性あったらどつき返さんかい！」

次第に半泣きになりながらユキを殴るコケザル。

「お前なんか、お前なんか...」

無抵抗のまま殴られるユキ。

(小鉄「ジュニア、お前ちょっと行ってチエちゃん呼んでこい」)

(ジュニア「分かった」)

\* \* \*

食堂「チエちゃん」。

ホルモンを焼いているチエ。

ヨシ江が料理を手伝い、千春が洗い物をしている。

チエ「おばちゃん、かんにんな。コケザルがサボったばかりに...」

千春「いえ、毎日やらしてもうてることですから。私も働かんと身体なまってしまいますわ」

客「チエちゃん、どないしとったんや。ここに来てチエちゃんの顔見られへんと寂しかったわ」

「おおきに。これからも毎日来たってやー」

営業スマイルを浮かべるチエ。

ジュニアが店先に表れる。

チエ「なんやジュニア、小鉄がどうかしたんか。最近弱っとるみたいやからな」

(ジュニア「チエちゃん、はよ、ひょうたん池来てくれ！ チエちゃんの彼氏がどつかれまくっとるんや」...もちろんチエにはニャーニャーとしか聞こえない)

チエ「ジュニア...もしかしたら...」

チエの顔から血の気が引いた。

「お母はん、ちょっと店お願いするわ」

ヨシ江「どないしましたんや」

「やっぱり...。ウチ、なんかさっきからイヤな予感...」

血相を変えて表に飛び出すチエ。ジュニアの後を追ってひょうたん池に走る。

フラフラになりながらチエの店に向かうマサル。その後続くタカシ。

マサル「チエー 俺の話聞いてくれー 聞いてくれんと俺何も手につかんのや」

震える声で叫ぶマサル。

タカシ「今日ノート、チエに渡しといたど」

マサル、走るチエの姿を発見する。

「チエー」

後を追いかけて走るマサルとタカシ。

ジュニアの向かう方角がひょうたん池であることを察知したチエは、ジュニアを追い越して全力で走っていく。陸上大会で各校の並みいるエースをごぼう抜きにした「黄金の足」がフル回転する。

追い越されたジュニア「恐ろしい速さや...あれが愛の力か」

振り返ると、マサルが足をもつらせて倒れている。

ジュニア「これも愛の形か...」

\* \* \*

チエがひょうたん池に到着したとき、コケザルは倒れているユキの側に立ちつくしていた。

「コケザルー！ あんた何してるんやー！」

叫びながら走ってくるチエ。

そのとき、コケザルの背後からプロレスラーのような大男が近づいてきた。

「金剛！」振り返って叫ぶコケザル。

金剛（倒れているユキを見ながら）「こいつ、ミナミの用心棒やないか。コケザル、お前がやったんか。やるやんけ」

コケザル「……」

金剛「こいつには前、えらい目に遭わされたんや。ちょうどええわ。二度と起きあがれんようにしたる」

倒れているユキに目を血走らせて思いきり跳びかかろうとする金剛。

金剛「死ねー！」

コケザル「止め！」

チエ「ユキー！！」

その瞬間、黒い弾丸のような影が金剛の横っ腹にぶつかり、金剛の巨体が宙に舞った。

衝撃で気を失った金剛と、肉弾となって金剛に突進した小鉄の二つの身体が地面に落ちる。

ユキに駆け寄るチエ。両手で上体を抱え起こす。

チエ「あんた…なんで…」

ユキ「……」

チエ「黙って殴られとったんか…」

ユキ（微笑みながら）「…滑って転んだだけや」

チエ「……………」

コケザル、いたたまれなくなり、走って逃げ出す。

遅れて到着したジュニア、倒れている小鉄を発見し、助け起こす。

ジュニア「小鉄！」

小鉄「ワシも年取ったなあ…こんなことで…」

小鉄の身体を診ると、肋骨が何本か折れていた。

ジュニア「お前、最近は歩くのも辛いゆうてたのに…」

小鉄、ガックリと気を失う。

\* \* \*

真夜中。食堂の2階にあるチエの部屋。

小鉄を胸に抱きながら、布団で眠っているユキの横にじっと座っているチエ。

ヨシ江が障子を開けて静かに入ってくる。

「よう寝てはりますな」

チエ、無言のまま、微動だにしない。

「あんたも少しは寝といたほうがええんとちがいますか。明日から学校ですやろ」

「.....お母はん」

「何ですか」

「...なんで、男てこんなにアホなんやろ」

「.....」

「何にもならんケンカばかりして...夢とかプライドとか、アホなことばかり」

「.....」

「ウチ、昔お母はんに、何でお父はんのこと好きになったんて聞いたことあるやろ」

「...そうでしたかな」

「あのとき、ウチ、ホンマに分からんと悩んどってんで」

「.....」

「お母はん、あのとき答えてくれへんかった...」

ウチ、お母はん恥ずかしがってるだけやと思てた」

「.....」

「でもな、ウチも今、なんでこの人のこと好きになったんか聞かれても、

なんて答えてええか分からへんわ」

「.....」

再び無言になるチエ。いつの間にか寝息を立てている。

ヨシ江、チエの肩に毛布を掛け、静かに部屋を出る。

\* \* \*

<チエのモノローグ>

次の朝、ウチが目を覚ましたとき、ユキはおらんかった

小鉄もいなくなってた

お母はんも気がつかんかったらしい

とりあえず学校に行く準備してたら、病院にいるオバアはんから電話がかかってきた

お母はんが電話取ったんやけど、受話器の向こうからえらい慌てた声がウチにも聞こえてきた

ゆうべ、若い男が夢枕に立ってテツがゆうんやて――

テツ、そのときは半分寝てたからその人の言うことを素直に聞いとったんやけど、

今になってお化けやゆうて大騒ぎしてるらしい

オバアはんは完全に寝てたんで全然気づかんかったんやけど、

ウチに関係あることやから、すぐ来てくれてテツが騒いでるて――

いつもやったら相手にせえへんけど、このときは何かピンと来たんで、学校休んで病院に行くことにした

病室に着いたら、テツがウチの顔見て「お化けー」なんてゆうもんやから、力抜けたけど、話聞いてみたら、若い男の人と話したのはホンマみたいやった  
その人は、テツに会いたかったとか、ウチのことをよろしく頼みますとかゆうたらしいけど、テツの話やからどこまでまともに受け取っていいかは分からへんかった  
ウチは、それがお化けやないことは確かやと思たから、とにかくテツを安心させようと思た  
それよりウチが知りたかったのは、「よろしく頼む」ゆう言葉の意味やった  
まさか———ウチまたイヤな予感———でも...

夕方まで一緒にいて、なんとかテツを落ち着かせて、病院を出たら、お好み焼き屋のオッチャンが慌てて駆け寄ってきた ジュニアが今朝からいなくなったとゆうのだ  
ウチが小鉄もいなくなったと言うと、ふたりでどっか行ったに違いないとゆうことになった 小鉄はとてもひとりで出歩ける身体やなかったから———  
ウチは、なぜかふたりがもう帰ってけえへんような気がしたんやけど、それをオッチャンに言うのはやめといた

店の準備もあるので、とりあえず家に帰ることにした  
ユキも小鉄も、ウチが探しても見つからんところにおるような気がしたから...

家で昨日タカシから渡されたマサルのノートを読んでみた  
（「やっぱり男はアホや...」）  
（「これにどうゆう返事書けゆうんや...」）←これはウチの心の声  
仕方ないから、ノートの最後の頁にこう書いて、マサルの家の郵便受けに入れとくことにした

「マサル、嬉しかった アリガトウ  
これからも、つらいときは、昔みたいに  
ウチの悪口考えて元気出して！ チエ」

\* \* \*

西萩高校。

ヒラメ「チエちゃん、珍しいやんか」

チエ「何が？」

ヒラメ「何が、て今日の走り高跳びやん。チエちゃん今まで引っかかったことなかなかったのに...もしかしたら、疲れてるんとちゃう？」

チエ「そうかなあ...」

ヒラメ「今度の体育祭、なんぼ頼まれても去年みたいに全種目出たりせんほうがええで。いくらチエちゃんでも体壊すわ」

チエ「あれは確かにまずかったわ。次の日疲れて店休んでしもたもん」

ヒラメ「そういえば、オッチャン今度の日曜日に退院するんやろ」

チエ「うん」

ヒラメ「オッチャン帰ってきたら、チエちゃんとかまた賑やかなって楽しなるなあ」

チエ「そうかな...」

(ヒラメ「チエちゃんやっぱりなんか元気ないなあ。オッチャンの話するときはいっつも嬉しそうやのに...」)

ヒラメ「じゃあ、さいなら」

チエ「さいなら」

(ヒラメ「...チエちゃん家であっちやったかな?」)

\* \* \*

ひょうたん池まで歩いてきたチエ。

ベンチに座る。

よくユキと待ち合わせた場所だ。

あの日以来、チエの心にはぽっかり穴があいてしまった。

ユキはいなくなった。小鉄もジュニアもいなくなった。コケザルもまた姿を消した。

マサルは叔父さんの家に移って、そこから学校に通うようになった。

「ああ、ウチは日本一...」

「幸せな少女や！」

顔を上げると、そこに千春と花井が並んで立っていた。

そしてその後ろには...

「ユキ！」

小鉄を抱いたユキがいた。

## 第十二章

---

「お父は一ん！」

グランドの向こうから観覧席に手を振るチエ。

「チエー！」

まだ右足のギブスが取れないテツが得意満面で手を振り返す。

隣にはヨシ江が座っている。その隣にはオバアはんとオジイはん。

その後ろで花井が千春と並んで、息子夫婦の一家（渉、朝子、アキラ）と一緒に見物している。

木の上から見物する小鉄とジュニア。

高校生活最後の体育祭。ヒラメの事前の心配をよそに、元気一杯のチエはほとんどの種目に出場。超人的な活躍でクラスを引っ張っていた。

最後の種目、リレーの入場行進でもまだまだ余裕綽々だ。

100m、200m、400m、1600mの最終リレーは、優勝クラスを決める決定的な意味を持っている。チエの3年2組は、僅差でトップの1組を追っていた。もちろんアンカーはチエ。

スタートの合図が鳴った。第一走者、第二走者が終わったところでトップは1組、2位が3組、2組はやや遅れて3位。第三走者の400mでやや差をつけられ、トップから半周遅れでアンカーのチエにバトンが渡った。

「チエー！ いったれー！ 根性見せたれー！」

テツはカルメラ兄弟に担がれていつのまにか観覧席の最前列にいた。隣には百合根がいる。そして百合根の隣には高校生になった息子のカオルが。

リレーの結果は書くまでもないだろう。チエはメチャメチャ速かった。2位に1周半の差をつけて堂々のゴールインを果たしたチエを待ちうけていたのは、「じゃリン子チエ」レギュラーメンバー一同による狂喜の祝福だった。

もみくちやにされ、胴上げされるチエ。

「花火上げろー！ 爆弾もって来いー！ 大阪中に知らせたるー」と訳のわからんことを叫びながら、思わずヨシ江はんと抱き合うテツ。それを見たオジイはんの嬉しそうな顔。

お祭り騒ぎは食堂「チエちゃん」に場所を変えて、その日の夜中まで続いた。

\* \* \*

宴が終わり、皆が帰った後の食堂。

退院後久しぶりに大はしゃぎしてすっかり眠り込んでしまったテツを囲んで、チエ、ヨシ江、オバアはん、オジイはん。

オバアはん「よう寝てますなあ」



ヨシ江「疲れたんですわ。久しぶりに賑やかにやりましたから」

片付けのために奥に引っ込む。

オバアはん「チエのおかげでテツもわたいも入院中のストレスが発散できましたわ」

チエ「ウチもさすがに疲れたわ」

オバアはん「後片付けは明日でよろしいやろ。今日はもう休みなはれ」

チエ「ウチ、なんかもう、今日一日で人生の運使い果たしたような気ィするわ」

オバアはん「そんなことおまへんやろ。チエの人生はこれからですわ。日本一不幸やった少女がこれから世界に大きくはばたきますのや」

チエ「あかん、オバアはん、まだ酔うてる...」

オジイはん「それにしても、めでたいめでたい」

オバアはん「あんさん、何ゆうてますのや」

オジイはん「何て、テツとヨシ江はん、抱き合うてたやないか」

（片付けに出てきたヨシ江、赤くなる）

オバアはん「まだ夢見えますのか。あれはもののはずみちゅうやつですわ。テツは死ぬまで変わりまへんわ」

チエ「テツの話になるといきなり現実に戻るなあ」

オバアはん「ところで、宴会の間コケザルは何してましたんや。ずっと奥におったみたいですけど」

チエ「流しで片付けモンしてたみたい」

オバアはん「殊勝なことですなあ。コケザルが心入れ替えたちゅうのに、この男は...（テツを見ながら）」

チエ「コケザル、ウチのお母はんと話するの好きやねん」

と言って奥で洗い物をしているヨシ江の方を見る。

オバアはん「そういえば、チエ、ちょっと聞きにくいことですけど」

酔いの勢いも手伝って、大胆になっている菊が思わず口を滑らせた。

「あなたの付き合うてる人は、テツのこと知ってますんか」

「知ってる。まだちゃんと会うたことはないけど」

「ちゃんと、てどうゆうことでっか」

「一回夢で会ったことはあるみたい」

「??? ...わたい気にしてますんや。テツには会わせん方がよろしいで」

「いつまでもそうゆうわけにもいかんわ」

「会うときにはわたいも立ち会いますからな。いらんことゆうたらどついたる」

「心配いらん思うで。ウチ、テツがどんな人間か大体話してあるし、ユキも会いたいゆうとったから、明日にでも会わせよう思てんねん」

「そうだっか...まあチエが選んだ人やから間違いないとは思いますが」

「それにしても、その人、千春はんの親戚なんですやろ」

「うちもそれ聞いたときはびっくりしたわ」

「なんか出来すぎた話ですなあ...」

「でも、一番びっくりしとったんはオバちゃんやっつんとちゃうかな」

「わたい、千春はんやヨシ江はんから話聞いただけですけど、中々立派な子みたいですな」

「そう？」思わず笑みがこぼれるチエ。

「ええ男やし、ケンカは強いし、男気はあるし...」

「そうかなあ」

まるで自分のことを言われたように照れて頭をかく。

「コケザルが立ち直ったんも彼のおかげでしたんやろ」

「コケザルがヤクザと手エ切るの助けたらしいねん。それでしばらく留守にしとってん」得意顔で饒舌になるチエ。

しかし-----

チエとオバアはんが夢中になって話している間、目を覚ましたテツはじっと二人の話に耳を傾けていた。

（「ええ男、ケンカが強い、男気...何ゆうとるんじゃ。根性あったらワシと勝負せんかい」）

（「ワシがそいつポコポコにして、チエに二度と会えんようにしたる」）

テツの中には、初めて経験する、得体の知れない感情が渦巻いていた。

\* \* \*

次の日。ひょうたん池。

チエが歩いてきて、ベンチに座る。

後ろの茂みに隠れている怪しい男たち。

テツ「来よった来よった」

カルメラ兄（小声で）「悪趣味な父親やなあ...娘の逢引き覗き見するなんて」

カルメラ弟（小声で）「朝からずっとしゃがみっぱなしで疲れたわ」

松葉杖なしで歩けないテツは、朝、散歩に行ってくるといって家を出た後、カルメラ兄弟に担架を持ってこさせ、担がせてここにやって来たのだ。

ベンチに座って、編物を始めたチエ。

テツ「あいつ、完全に色気づいとるな...ヨシ江の真似なんかしやがって」

カルメラ兄「でも中々サマになってまっせ」

ユキがやって来る。学生服に学生帽。

テツ「あいつか...なんじゃい、学生服なんか着やがって」

カルメラ弟「やっぱり、こないだここでコケザルとケンカしとった奴や」

テツ「ケンカ？」

カルメラ兄「相当強かったで」

テツ「完全にチンピラやんけ。くそー、チエ、そんな奴と...」

チエとユキ、しばらく談笑する。

おもむろにチエが立ち上がる。

「お父はんーこっち来てー」

ひっくり返る3人の男たち。

チエ「そこにおるんはわかってるんや。いつまでも隠れとったら体裁悪いわ」

テツ「あかん、完全に読まれてる...」

観念して出てくる3人。テツ、松葉杖をついてベンチに近づく。

ユキがテツの方に歩いてくる。

ユキ「お父さん、初めまして。ユキといいます」

帽子を取って、深深と一礼。

「え...いや...あの...」

どう対応していいか分からないテツ。発作的に右手で頭を搔こうとして、松葉杖を手放してしまい、倒れそうになる。すかさず身体を支えるユキ。

「大丈夫ですか」

「いや...その...だ、大丈夫、大丈夫」

明らかにカタくなっているテツ。見物して面白いカルメラ兄弟に向かって

「こらー！ 見せモンとちゃうどー！」

近づいてきて、松葉杖を拾うチエ。

「いきなりこれやもんなあ...」

ユキ「せっかくだから、どっかで昼飯でも。お父さん、天井なんかどうですか」

テツ「天井！ ワ、ワシ好物やんけ」

チエ「行こ、行こ」

松葉杖で歩き出そうとするテツ。ユキ、テツの前に回って背中向きにしゃがむ。

テツ「な、なんやねん」

ユキ「お父さん、その足やと大変でしょう。そこまでおぶっていきますわ」

テツ「そんなことできるかい」

チエ（ニコニコしながら）「じゃあウチがおんぶしたるか」

テツ「アホー」

ユキ「どうぞ、さあ」

「.....」

しばらく突っ立ったまま悩んでいるテツ。

無然とした表情でユキに背負われながら「だるま屋」に向かう。

\* \* \*

「だるま屋」。

チエ、ユキが並んで腰掛け、その前にテツが座っている。

テツ「おまえ、なかなかええ身体しとるやんけ」

ユキ「そうですか」

テツ「ワシ、おまえにただおぶってもろてたわけやないど。おまえの力を調べとったんじゃ」

チエ（小声で）「なにミエ張ってるねん」

ユキ「そんな気がしました」

テツ「.....」

ユキ「.....」

黙りこくる二人。

（チエ「あかん、なんとかせな...なにかきっかけをつくるんや」）

チエ（元気な、しかし上ずった声で）「お父はん、ウチな...」

言いかけた途端、テツが真剣な表情でユキを見据え、言葉を発した。

「...お前、チエに惚れとるんか」

（チエ「！」）

ユキ「...はい」

テツ「.....」（額に汗。思いつめたような表情）

\* \* \*

<チエのモノローグ>

そのあと、天井を食べ終わるまで、お父はんもユキも一言もしゃべらんかった  
ウチは色々話したいことあったんやけど、二人の様子があまりにマジメやった  
から何もゆわれへんかった

食べ終わるとお父はんはすぐ「帰る」ゆうてそのまま出て行ってしもた

ユキは、お父はんはええ人やゆうてたけど、あんなんでホンマにわかったんやろか...

その日、お父はんは家に帰ってけえへんかった

せっかくウチ料理作って待ってたのに――――

\* \* \*

ひょうたん池。

水面に映る月。

ベンチに座っているテツの背中。

近くの木の上にいる小鉄とジュニア。草の間から虫の音がする。

小鉄「秋も深なってきたなあ...いい音色やないか」

ジュニア「小鉄、テツ、さっきから月でも眺めとるんか」

小鉄「...今夜はそっとしといたろ」

## 終章

---

西萩高校。

美術室で卒業製作の絵を描くヒラメ。

「.....」

「...ヒラメちゃん、そろそろ休憩せえへん？」

おそるおそる提案してみる、三時間同じ姿勢で座りっぱなしのチエ。

しかし、完全に絵に集中しているヒラメの耳に、その声は聞こえないようだ。

静かな、緊張した空気の中で、3月の午後のけだるい時間が流れていく。

チエは、もう3年生の授業の終わった高校に、ヒラメのモデルとしてこれで一週間通い続けている。

（「これがあるからあんまり気がすすまんかったんや...」）

すると突然、ヒラメが立ちあがった。

「できた！」

「できた！ 見して見して！」

椅子から飛び上がって、キャンバスに駆け寄るチエ。

「まだ背景の細かい部分はこれからやけど、チエちゃんのところはこれで完成や」

「.....」

思わず息を呑むような、繊細で美しい肖像画だった。

チエは、そこに描かれているのが自分だとは一瞬信じられなかった。そこにいたのは、素朴で、それでいて優雅な気品にあふれた一人の少女の横顔だった。

もしチエがレンブラントを知っていたら、彼が亡き妻を描いた『サスキア』のイメージを思い出したに違いない。

「どうやろ」おそるおそる尋ねるヒラメ。

「ありがとう...こんなキレイな絵...」

「この絵描き終わったら、チエちゃんにあげるわ」

「そんなもったいないこと...」

「ウチ、チエちゃんのために描いてん。だから、もらってほしいねん」

「.....」

「ウチが東京行ったら、あんまり会われへんようになるやろ。ウチはチエちゃんのこと絶対忘れへんけど、チエちゃんにウチのこと忘れてほしくないから...」

「ウチかて、ヒラメちゃんのこと絶対忘れへん！」

チエの肖像画が、涙で曇ってぼんやりした。

\* \* \*

屋根の上。

小鉄「ジュニア、覚えてるか。おまえ、春になるとおかしなことばかり言い出したもんや」

ジュニア「...昔の話や」

小鉄「おまえに、チエちゃんが春休み終わったら何年生になるか聞かれたときはワシも焦ったなあ」

ジュニア「...若かったんや。あの頃は、世の中なんか間違ってると思ってた。当たり前なのが通用せんのが我慢できんかったんや」

小鉄「今は違うんか」

ジュニア「今はそんなこと当たり前や思てる。世の中、真っ直ぐいかへんからおもろいんや」

小鉄「...じゃあ、今度はワシに質問さしてくれ。チエちゃん、4月からは何年生になるんや」

ジュニア「何年生で...3月で高校卒業やろ」

小鉄「その後の話や」

ジュニア「その後は...もうないとちゃうか」

小鉄「高校はないけど、大学はあるやろ」

ジュニア「チエちゃん、大学行くんか」

小鉄「それを聞いているんや」

ジュニア「それは...」

\* \* \*

「ウチ、大学は行かへん。このまま店で働く」

花井の家。チエ、ヨシ江、オバアはん、オジイはん、花井、そして千春が客間で席を囲んでいる。

花井「チエちゃんの気持ちは分かった。ワシも、正直ゆうて、大学なんか無理して行くことないと思てる。ただ、周りに気ィ使う必要はない、て言いたかったんや。チエちゃんにやりたいことがあるんやったら、何でもゆうてくれ。ワシも千春はんも、援助は惜しまんつもりや」

千春「チエちゃん、大事な時期やから、よう考えてほしいんですわ。あんたは何にでもなれる人間や。別に大学には行かんでもええ。でも、わたし、チエちゃんがこのまま一生ホルモン焼いて過ごすのはもったいない思いますねん。店

がやりたかったら、キタの一等地に料亭建ててあげてもかまへん。外国に行きたかったら、留学の費用も面倒見ます。とにかく、わたしをあんたの力にさせてくれまへんか」

ちょうど去年の今ごろ、ホルモン屋の土地を買い取りたいと申し出たときと同じ情熱で説得する千春。

千春の情熱が本物だということは、チエもよく知っていた。彼女が何の見返りも期待せず、純粹にチエに惚れこんでいるだけだということも。しかし、いくら善意の申し出であっても、チエは赤の他人の金で生活することはどうしても嫌だった。それは子供のときから自分で稼いだきたチ

エの身体に染み込んだ信条のようなものだった。

チエ「うちにはもう考えがあるねん。大学には行かへん。手に職つける。洋裁はお母はんに習う。外にもいろいろ考えてる。他人（ヒト）の世話にはならへん」

チエの強い調子に、千春も花井もそれ以上のことは言えなかった。

花井「ヨシ江はんはどうや。ヨシ江はんも、ええかげん昼間は洋裁学校で仕事、夜は店で仕事ゆう生活もきついやろ」

千春「どうです、もう昼間の仕事はええんとちがいますか。今の家のお金は気にせんと」

ヨシ江「わたしは今のままでも全然かまいませんけど...」

オバアはん「...すまへんなあ、皆に余計な心配かけるのも全部あの男のせいや」

オジイはん「それは今ゆうてもしゃあないことやろ」

オバアはん「何がしゃあないことですか。テツがまともに働いとったらチエもヨシ江はんもこんな苦労せんとすむんですわ。それも元を辿ればわたいとあんたに責任がありますんや。だいたい...」

花井「テツのことはええ。あれはまた別の問題や」

\* \* \*

その頃、モンダイの男は...

お好み焼き屋「かたぎ屋」。

「こう来たら、こう...」

「こっちから行くと、こうやって...いきなり足をはらって...こう右フック」

一人で身振り手振りしながらブツブツつぶやいているテツ。

百合根「...おまえ、もうええ加減大人になれや。チエちゃんのカレシにどんな恨みがあるんや」

テツ「アホー、ワシ、一回あいつに勝っとかんとチエにカッコつかんやんけ」

百合根「わからん考え方やなあ...」

テツ「ワシ、身体回復してからずっと、あのガキどついたら思てるのに、あいつワシに会いたないから逃げまくっとるんや」

百合根「逃げてるのはおまえちゃうか。チエちゃん、テツが会いたがらんから困っとるゆうてたど」

テツ「うるさいわい」

と言いながら右ストレートを繰り出す。

「こんにちはー」

「！」

入ってきたミツルの顔面にモロにパンチが命中。



「...オレでよかったわ。一般人やったら連行せなあかんとこや」

意識を取り戻したミツル。

テツ「おまえ、仕事にお好み焼きなんか食いに來てるヒマあったら、あのユキとかゆう奴逮捕してこい」

ミツル「メチャメチャゆわんといてくれ。罪のない人間逮捕できるかいな」

テツ「ミツル、頼むからそのピストル一日貸してくれ。それであのガキびびらしたる」

ミツル「そんなことしたらオレ免職や...それにオレ、お好み焼き食いにきたんとちゃうで。仕事で來たんやから」

百合根「なんかあったんでっか」

ミツル「いや...コケザルがまたいなくなったらしいんや」

テツ「あのサル、また逃げよったんか」

百合根「またそのうち帰ってくるんとちがうか」

ミツル「それがなあ、今回はちょっと...」

\* \* \*

ひょうたん池。

いつものようにベンチで待ち合わせるチエとユキ。

本当は毎日でも会いたいの、最近ユキは用事があると言って連絡がつかないことが多く、二人が会うのはけっこう久しぶりだ。ユキについてどんなことでも知りたい今のチエには、ちょっと不満な日々が続いている。

チエ「まだ店の準備まで時間あるから、ちょっとお茶でも飲まへん？」

「また『防空壕』か」

笑いながらユキが言う。

チエ「うち、なんかあの店好きやねん」

本当はちゃんとした理由があるのだが、ユキにはまだ話していない。

\* \* \*

喫茶「防空壕」。

ユキ「明日、卒業式やろ」

チエ「うん」

ユキ「卒業式の後には学校の友達とパーティーでもやるんか」

チエ「やるけど、すぐに抜け出すから、二人で会えへん？」

ユキ「オレ、明日はちょっと...」

「あかんの？」チエの顔が曇る。

それを見たユキ「...いや、大丈夫や。何とかする。夕方、ひょうたん池で待ってるから」

チエ「よかった。ウチ、ユキに見せたいモンあるんや」

ユキ「何や」

チエ「明日なったら分かる」

ユキ「...じゃあ楽しみにしとくわ」

\* \* \*

「防空壕」を出て、二人で食堂「チエちゃん」まで歩く。

最近、二人で歩いているとユキは無言になることが多い。

でも、決して気まずくはなく、そんな時間もチエには心地よかった。

しかし今日は、思いつめたようなユキの横顔が、いつもより遠くに見える気がする。

付き合い出して半年になろうとするのに、ユキはまだチエの手を握ろうともしない。男ってそんなもんなんやろか...恋愛と呼ばれるかもしれないものを今初めて経験しているチエは、漠然とそんな関係を受け入れていた。

（「テツもお母はんと一緒に歩く時は離れてコチコチなっていたみたいやからな...」）

店の前に来た。

チエ「じゃあ、ウチ、店の準備あるから」といつものセリフ。

ユキ「うん、じゃあまた...明日」

チエ「明日絶対に来てな。約束やで」

ユキ「うん、夕方、ひょうたん池で」

「おい」

チエが店に入るのを確かめ、歩き出そうとしたユキを引きとめる声がした。

振り返ると、コケザルが立っていた。

\* \* \*

「おおきに、また来てやー」

食堂「チエちゃん」の最後の客が帰っていった。

「お母はん、奥のご飯、先に食べといて。ウチ、お父はん帰ってくるの待ってるから」

「何ゆうてますの、お父はん、もう帰ってきてご飯食べましたがな」

「え、いつの間に？」

「チエが料理してる間に、裏口から入ったから気がつかんかったんやないですか」

「もう寝てる？」

「さっき二階上がったから、もう寝てるんやないですか」

チエが二階に上がると、テツはもう自分の部屋で布団にくるまっていた。（もっとも、「自分の部屋」とは言っても、二部屋しかないうちの、チエとヨシ江が寝る以外の部屋ということだが。

)

「テツ、寝てるんか」

反応がない。

「テツー」耳元で大きく叫ぶチエ。

「うるさい！ 聞こえとるわい」

「聞こえてるんやったら返事しいな」

「ワシ、おまえとは話したないんじゃ」

布団を頭までかぶったままのテツ。

「まだそんなことゆうてんのか...じゃあウチ、今から独り言ゆうから、別に聞かんでええで」

「.....」

「明日、高校の卒業式やねん」

「.....」

「うちはやっぱりお父はん来てくれへんのやろか」

「.....」

「好きやったガッコとも、もう明日で一生お別れや...

その最後の晴れ姿、お父はんに見てほしいのに...」

「.....」

「そういえば小学校の頃、お父はん一度授業参観に来てくれたことあったな...

あのとき、顔から火ィ出るほど恥かしかったけど、ホンマはすごい嬉しかった」

「.....」

「作文コンクールで『うちのお父はん』ゆう作文読んだときも...

ウチ、今もあのときの気持ちと全然変わってない」

「.....」

「マラソン大会のときは、靴買うてくれて、靴ずれせんようにて石鹸塗ってくれた...

ウチ、あの日、お父はんのために必死で走ったんや」

「.....」

「中学入るときも、今の高校受かったときも、お父はん誰よりも喜んでくれた...

今やから言うけど、ウチが必死で勉強頑張ったのはお父はんのためやってん」

「.....」

「ウチが勉強あかんの、お父はんのせいにされたくなくてん」

「.....」

「...ウチ、今、好きな人がいるねん。...その人、お父はんのこと、ええ人やゆうてくれた」

「.....」

「ウチな、前もゆうたけど、なんでお母はんがお父はんのこと好きになったか、分かってきたような気がするねん」

「.....」

「だってウチもお父はんのこと好きやもん」

「……」

チエ、立ち上がって、部屋を出る。

テツは、頭まで布団にくるまったまま、朝まで動かなかった。

\* \* \*

ひょうたん池。

「ユキー！」

チエが走ってくる。

「チエ、卒業おめでとう」

「…ありがとう」

息を切らしながらやっと答えるチエ。

「それ、なに抱えてるねん」

「これ持ってくるの、重かってんで」

そう言いながら風呂敷包みを解くチエ。

「ほら！」

「……これ、チエか」

「ヒラメちゃんゆう友達が描いてくれてん」

「…きれいな絵やな。周りにも色んな人が描いてあるわ」

木の上にいる二匹の猫。

ジュニア「あの絵はヒラメちゃんの最高傑作や」

小鉄「ほら、見てみい……ワシらも絵の中におるやないか」

チエの青春 終わり

## チエの青春

<http://p.booklog.jp/book/69626>

著者 : yoyogiz

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/yoyogiz/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/69626>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/69626>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社ブクログ